

SPARC T5-8 サーバー

設置ガイド

Copyright © 2013 , Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことにより起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ, AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

1. このドキュメントの使用方法	7
プロダクトノート	7
関連ドキュメント	7
フィードバック	7
Oracle サポートへのアクセス	8
2. サーバーの概要	9
関連情報	9
設置タスクの概要	9
関連情報	10
サーバーの概要	10
関連情報	11
フロントパネルのコンポーネント	11
関連情報	11
背面パネルのコンポーネント	11
関連情報	12
3. 仕様の確認	13
関連情報	13
物理仕様	13
関連情報	13
電気仕様	14
関連情報	14
環境仕様	14
関連情報	15
通気に関する注意事項	16
関連情報	16
4. 設置の準備	17
関連情報	17
出荷用キット	17
関連情報	18
取り扱い上の注意事項	18
関連情報	19
ESD 防止対策	19
関連情報	19
設置に必要な工具	19
関連情報	20
サーバーを準備する	20
関連情報	20
5. サーバーの設置	23
関連情報	23
ラックの互換性	23

関連情報	24
ラックに関する注意事項	24
関連情報	26
ラックを安定させる	26
関連情報	26
ラックマウントキット	26
関連情報	27
正しいラックマウント部品を選ぶ	27
関連情報	28
ラックの取り付け位置にマークを付ける	28
関連情報	29
ラックマウント部品を取り付ける	29
関連情報	32
サーバーを設置する	33
関連情報	34
CMA の取り付け	34
関連情報	34
CMA キット	35
正しい CMA 部品を選ぶ	35
CMA を取り付ける	36
6. サーバーケーブルの接続	37
関連情報	37
配線の要件	37
関連情報	38
ポートの識別	38
関連情報	39
USB ポート	39
SER MGT ポート	39
NET MGT ポート	40
ギガビット Ethernet ポート	41
VGA ポート	41
データケーブルおよび管理ケーブルの接続	42
関連情報	42
SER MGT ケーブルを接続する	43
NET MGT ケーブルを接続する	43
Ethernet ネットワークケーブルを接続する	44
その他のデータケーブルを接続する	44
CMA を使用してケーブルを固定する	44
関連情報	45
7. サーバーへのはじめての電源投入	47
関連情報	47
電源コードを準備する	47
関連情報	48
SER MGT ポートに端末またはエミュレータを接続する	48

関連情報	49
はじめてシステムの電源を入れる	49
関連情報	50
Oracle ILOM システムコンソール	51
関連情報	51
OS のインストール	51
関連情報	51
プリインストールされている OS を構成する	52
新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM CLI)	52
新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM Web インタフェース)	54
Oracle Solaris OS の構成パラメータ	56
関連情報	56
静的 IP アドレスの SP への割り当て	57
関連情報	57
SP にログインする (SER MGT ポート)	57
静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる	58
関連情報	60
用語集	61
索引	65

1

・・・ 第 1 章

このドキュメントの使用方法

このドキュメントでは、Oracle の SPARC T5-8 サーバーの設置の手順、背景情報、および参照物について説明します。このドキュメントは、同様の製品の設置について高度な経験とトレーニングを積んだ技術者、システム管理者、および承認サービスプロバイダを対象としています。これらの手順は、システム管理者が Oracle Solaris オペレーティングシステムを使用した経験があることを前提としています。

- [7 ページの「プロダクトノート」](#)
- [7 ページの「関連ドキュメント」](#)
- [7 ページの「フィードバック」](#)
- [8 ページの「Oracle サポートへのアクセス」](#)

プロダクトノート

この製品に関する最新の情報と既知の問題については、次にあるプロダクトノートを参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/T5-8/docs>

関連ドキュメント

ドキュメント	リンク
すべての Oracle 製品	http://docs.oracle.com
SPARC T5-8 サーバー	http://www.oracle.com/goto/T5-8/docs
Oracle Integrated Lights Out Manager (Oracle ILOM)	http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs
Oracle Solaris 11 OS	http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs
Oracle Solaris 10 OS	http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs
Oracle VM Server for SPARC	http://www.oracle.com/goto/VM-SPARC/docs
Oracle VTS	http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html#sys_sw

フィードバック

このドキュメントについてのフィードバックは次からお寄せください。

<http://www.oracle.com/goto/docfeedback>

Oracle サポートへのアクセス

Oracle のお客様は、My Oracle Support を通して電子サポートにアクセスできます。詳細については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> または聴覚に障害をお持ちの場合は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

・・・第2章

サーバーの概要

これらのトピックでは、設置タスクのリストを示し、サーバーの概要を提供し、重要なコンポーネントについて説明します。

- ・ [9 ページの「設置タスクの概要」](#)
- ・ [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- ・ [11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)
- ・ [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)

関連情報

- ・ [33 ページの「サーバーを設置する」](#)
- ・ [第6章](#)
- ・ [第7章](#)

設置タスクの概要

これらは、サーバーを設置し構成するために実行するタスクです。

手順	説明	リンク
1	サーバーの最新情報については、『SPARC T5-8 サーバードキュメント』を参照してください。	『SPARC T5-8 サーバードキュメント』
2	サーバーの機能、仕様、および設置場所の要件を確認します。	10 ページの「サーバーの概要」 第3章
3	注文したすべてのアイテムを受け取ったことを確認します。	17 ページの「出荷用キット」
4	設置に必要なサーバーの機能、コントロール、LED について学びます。	11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」 11 ページの「背面パネルのコンポーネント」
5	安全対策と ESD 対策を取り、必要な工具を組み立てます。	18 ページの「取り扱い上の注意事項」 19 ページの「ESD 防止対策」 19 ページの「設置に必要な工具」
6	サーバーをラックに設置します。	第5章

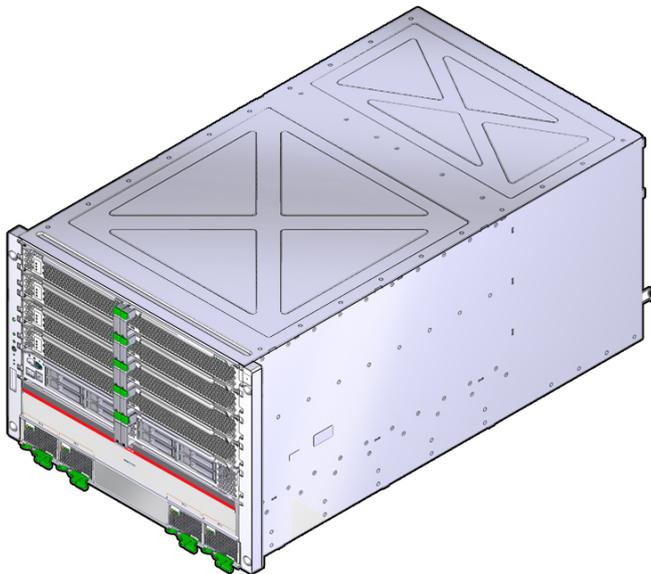
手順	説明	リンク
7	データケーブルと管理ケーブルをサーバーに接続します。	第6章
8	電源コードをサーバーに接続し、Oracle ILOM SP を構成し、サーバーにはじめて電源を入れ、オペレーティングシステムを設定します。	第7章

関連情報

- 『サーバープロダクトノート』
- サーバーの安全性とコンプライアンス
- 『サーバー管理』
- 『サーバーサービス』

サーバーの概要

このトピックでは、サーバーの主要なコンポーネントおよび機能の概要を説明します。



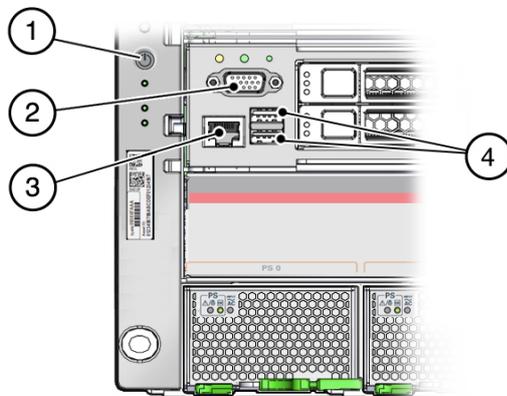
コンポーネント	説明
シャーシ	8RU フォームファクタのラックマウント可能なサーバー。
CPU	最大 8 台の SPARC T5、16 コアのチップマルチプロセッサ (Chip MultiProcessor, CMP) (コアあたり 8 スレッド)。
メモリー	128 DDR3 DIMM スロット (容量: 16 または 32G バイト)
I/O 拡張	PCIe Gen3 カードスロット x 16 (x8 電気インタフェース)。
ストレージデバイス	内蔵ストレージの場合、サーバーは次を提供します。 <ul style="list-style-type: none"> • 2.5 インチハードドライブ x 8 (前面)。 • スロットローディング式 USB 接続 DVD+/-RW ドライブ (前面)。
USB ポート	外部 USB 3.0 ポート x 4 (前面 x 2、背面 x 2)
ビデオポート	高密度 DB-15 ビデオポート x 2 (前面 x 1、背面 x 1)。
Ethernet ポート	<ul style="list-style-type: none"> • RJ-45 SER MGT ポート x 2 (前面 x 1、背面 x 1)。 • 10/100 NET MGT ポート x 1

コンポーネント	説明
	<ul style="list-style-type: none"> 10GbE、100/1000/10000M ビット/秒 x 4 (背面)
電源装置	ホットスワップ対応 AC 3000W 冗長電源 x 4 (2 + 2)。フロントパネルからアクセスします。
ファンモジュール	ホットスワップ可能な冗長ファンモジュール x 10 (N+1) (背面からアクセス)。
SP	Oracle Integrated Lights Out Manager (Oracle ILOM)。

関連情報

- 『サーバーサービス』
- Oracle ILOM のドキュメント
- [11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)

フロントパネルのコンポーネント



番号	説明
1	電源ボタン
2	VGA ポート
3	USB 3.0 ポート
4	SER MGT ポート

関連情報

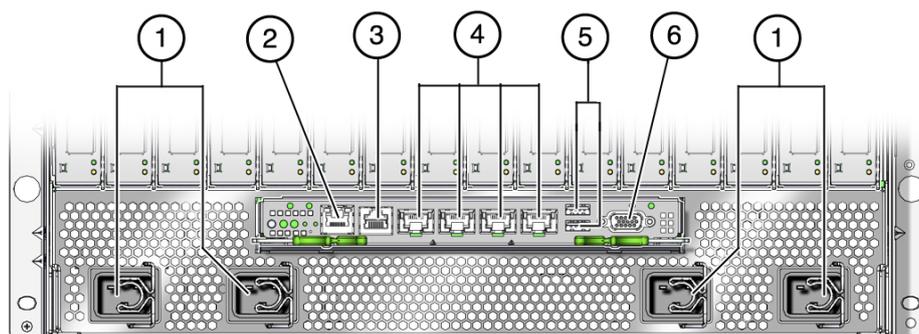
- [37 ページの「配線の要件」](#)
- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)

背面パネルのコンポーネント



注記

サーバーへのケーブルの接続は、適切な順序で実施する必要があります。電源コードは、データケーブルをすべて接続するまでは接続しないでください。



番号	説明	リンク
1	電源ユニット AC 入力	
2	NET MGT RJ-45 ネットワークポート	40 ページの「NET MGT ポート」
3	SER MGT RJ-45 シリアルポート	39 ページの「SER MGT ポート」
4	ネットワーク 10G ビット/秒ポート: NET0 - NET3	41 ページの「ギガビット Ethernet ポート」
5	USB 3.0 ポート	39 ページの「USB ポート」
6	VGA ポート	41 ページの「VGA ポート」

関連情報

- [11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)
- [37 ページの「配線の要件」](#)
- [36 ページの「CMA を取り付ける」](#)
- [44 ページの「CMA を使用してケーブルを固定する」](#)

3

・・・ 第 3 章

仕様の確認

これらのトピックでは、サーバーの設置に必要な技術情報と通気に関する注意事項について説明します。

- [13 ページの「物理仕様」](#)
- [14 ページの「電気仕様」](#)
- [14 ページの「環境仕様」](#)
- [16 ページの「通気に関する注意事項」](#)

関連情報

- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [17 ページの「出荷用キット」](#)
- [38 ページの「ポートの識別」](#)

物理仕様

説明	アメリカ	メートル法
ラックユニット	8U	8U
高さ	13.8 in.	350 mm
幅	17.5 in.	445 mm
奥行き	31.5 in.	800 mm
重量 (ラックマウントキットを除く)	261.5 lb	118.6 kg
保守用最小クリアランス (前面)	36 in.	914.4 mm
保守用最小クリアランス (背面)	36 in.	914.4 mm
通気用最小クリアランス (前面)	2 in.	50.8 mm
通気用最小クリアランス (背面)	3 in.	76.2 mm

関連情報

- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [18 ページの「取り扱い上の注意事項」](#)

- 第5章
- 14 ページの「電気仕様」
- 14 ページの「環境仕様」
- 16 ページの「通気に関する注意事項」

電気仕様

説明	値	注記
電圧範囲	200 - 240 VAC	
周波数	50 - 60 Hz	
200 VAC 時の最大動作入力電流	30A (コードあたり 16A)	
(実際の消費電流量は定格を 10% 程度まで超える場合があります) ¹		
200 VAC 時の最大動作入力電力	6000W	
(実際の消費電力は定格を 10% 程度まで超える場合があります)		
最大待機電力	260W	
アイドル入力電力 (最大構成) ²	3150W	
アイドル入力電力 (最小構成) ³	2740W	
ピーク AC 入力電力 (最大構成) ²	6340W	SpecJBB に準拠
ピーク AC 入力電力 (最小構成) ³	5810W	SpecJBB に準拠
最大放熱量	22,185 BTU/時, 23,405 KJ/時	

¹最大動作入力電流の値は、 $P \div (V \times 0.95)$ に基づいたものです (P = 最大動作入力電力、V = 入力電圧)。例: $1060W / (220V * 0.95) = 5.1A$ この式を使用して、入力電圧に対する最大動作電流を計算します。

²公称温度および電圧条件下での最大サーバー構成仕様 (8 基の 3.6 GHz T5 プロセッサ、128 枚の 32 GB DDR3 DIMM、8 台の HDD、および 16 枚の I/O カード)。

³公称温度および電圧条件下での最小サーバー構成仕様 (8 基の 3.6 GHz T5 プロセッサ、128 枚の 32 GB DDR3 DIMM、HDD なし、および I/O カードなし)。



注意

サーバー付属の電源コードのみを使用してください。

電力仕様については、次の場所にある電力計算機能を使用してください。

<http://www.oracle.com/us/products/servers-storage/sun-power-calculators>

関連情報

- 13 ページの「物理仕様」
- 第7章
- 14 ページの「環境仕様」
- 16 ページの「通気に関する注意事項」

環境仕様

このトピックでは、次の仕様について説明します。

- 温度、湿度、および高度
- 衝撃および振動
- 音響

表3.1 温度、湿度、および高度の仕様

説明	動作時		非動作時		注記
	アメリカ	メートル法	アメリカ	メートル法	
温度 (最高)	41 - 95°F (0 - 3000 ft で)	5 - 35°C (900 m で)	-40 - 149°F (0 - 3000 ft で)	-40 - 65°C (900 m で)	最大温度の低下: 3000 ft (900 m) を超過、1.8°F/1000 ft (1°C/300 m)
相対湿度	10 - 90% (81°F で)	10 - 90% (27°C で)	最高 93% (100°F で)	最高 93% (38°C で)	最高湿球温度 (結露なし)
高度	0 - 9840 ft (95°F で) ¹	0m - 3000m (40°C で) ¹	最高 40,000 ft	最高 12,000 m	

¹中国市場 (規制により設置時の高度が 2 km 以下に制限されることがある) を除く。

表3.2 衝撃および振動の仕様

説明	動作時	注記
衝撃	3 G, 11ms	半正弦
振動 (垂直)	0.15G	5 - 500 Hz (Swept-Sine 法)
振動 (水平)	0.10G	

表3.3 音響仕様

説明	アイドル状態での動作時	ピーク電力での動作時
音響出力 (LwAd 1B = 10dB)	8.2B	
音圧レベル (LpAm: バイスタンド位置)	65.7 dBA	83.2 bBA

関連情報

- サーバーの安全性とコンプライアンス
- [13 ページの「物理仕様」](#)
- [14 ページの「電気仕様」](#)
- [14 ページの「環境仕様」](#)
- [16 ページの「通気に関する注意事項」](#)

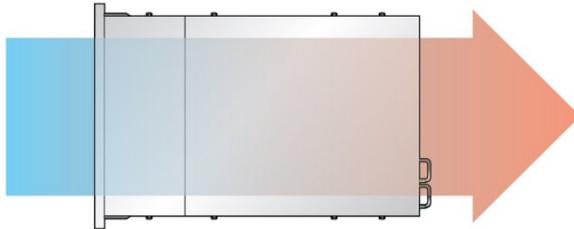
通気に関する注意事項



注意

サーバーの内部温度を安全な動作範囲内に保つためには、適度な通気が不可欠です。

通気はサーバーの前面から背面に流れます。



これらのガイドラインに従って、サーバーでの通気が制限されないようにします。

- 通気の最小クリアランスの仕様に従います。[13 ページの「物理仕様」](#)を参照してください。
- サーバーは前面が涼しい通路、背面が暖かい通路に面するように設置してください。
- 暖気をサーバーに向けないでください。
- ラックまたはキャビネット内で空気が再循環しないようにしてください。
- サーバー内部のコンポーネントを保守するときには、必ずエアダクトとバッフルを適切に取り付けてください。
- 通気を妨げないように、ケーブルを配線してください。

関連情報

- [24 ページの「ラックに関する注意事項」](#)
- [13 ページの「物理仕様」](#)
- [14 ページの「電気仕様」](#)
- [14 ページの「環境仕様」](#)

4

・・・第4章

設置の準備

これらのトピックでは、サーバーの設置に先立って従うべき注意事項、組み立てに必要な工具、および実行するタスクについて詳しく説明します。

手順	説明	リンク
1.	注文したすべてのアイテムが届いていることを確認します。	17 ページの「出荷用キット」
2.	安全性および静電放電の注意事項を確認します。	18 ページの「取り扱い上の注意事項」 19 ページの「ESD 防止対策」
3.	適切な工具があることを確認します。	19 ページの「設置に必要な工具」
4.	設置できるようにサーバーを準備します。	20 ページの「サーバーを準備する」

関連情報

- [第5章](#)
- [第6章](#)
- [第7章](#)

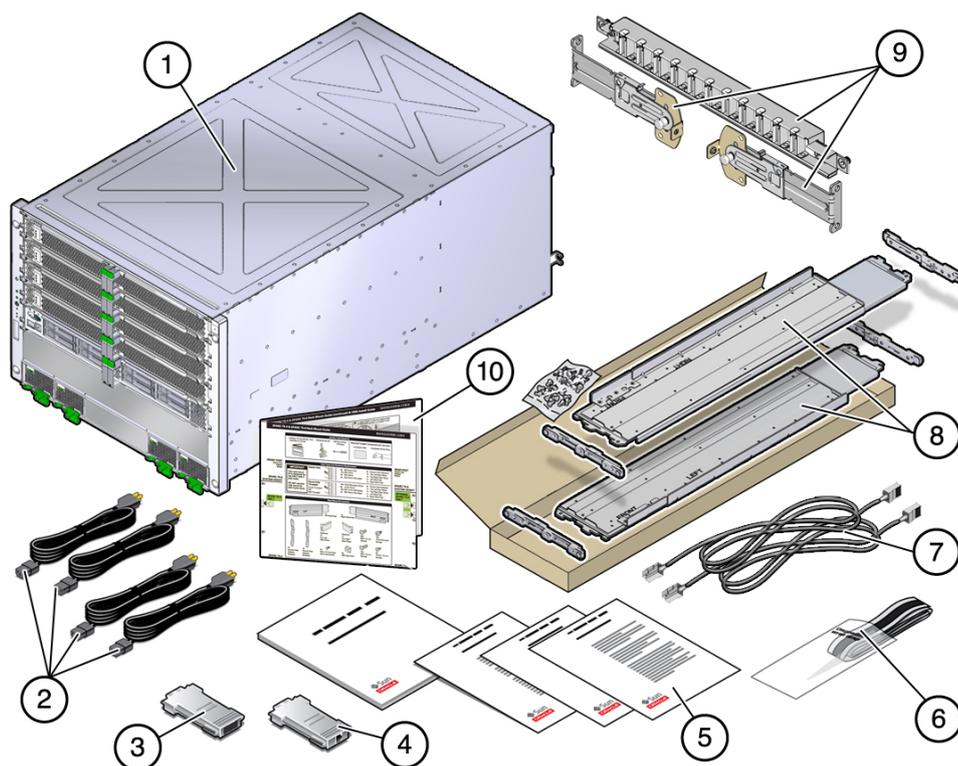
出荷用キット



注記

サーバーが到着したら、設置する環境にサーバーを置いてください。設置場所で、梱包を解かずにサーバーを 24 時間放置してください。この休止期間によって、温度衝撃および結露を防ぐことができます。

使用するサーバーと一緒に出荷されるコンポーネントがすべて届いていることを確認します。



番号	説明
1	サーバー
2	AC 電源コード (4 本)
3	RJ-45/DB-25 クロスアダプタ
4	RJ-45/DB-9 クロスアダプタ
5	印刷物のドキュメント一式
6	静電気防止用リストストラップ
7	Ethernet ケーブル (2 本)
8	ラック搭載キット
9	ケーブル管理部品
10	ラックバディーツェンプレート

関連情報

- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [26 ページの「ラックマウントキット」](#)

取り扱い上の注意事項



注意

取り付け作業を開始する前に、装置ラックの転倒防止バーを配置してください。



注意

装置をラックに導入するときは、上が重くなって転倒しないようにするために、常に下から上の順に行なってください。



注意

リフトを使用せずに 1 人でサーバーを移動しようとししないでください。1 人で設置する場合は、すべてのコンポーネントを取り外し、リフトを使用する必要があります。2 人で設置する場合は、すべてのコンポーネントを取り外す必要がありますが、リフトの使用はオプションです。



注意

ラックに装置を取り付ける各手順の開始前、作業中、および作業後に何をやろうとしているかを明確に伝えて、混乱を最小限にしてください。

関連情報

- [13 ページの「物理仕様」](#)
- [19 ページの「ESD 防止対策」](#)
- [第5章](#)
- [サーバーのスタートガイド](#)

ESD 防止対策

電子機器は、静電気により損傷する可能性があります。サーバーの設置またはサービス時は、アースした静電気防止リストストラップ、フットストラップ、または同様の安全器具を使用して、静電気による損傷を防止してください。



注意

静電気により損傷を受けると、サーバーを永久に使用できなくなったり、サービス技術者による修理が必要になる場合があります。静電気から電子部品を保護するには、部品を静電気防止マット、静電気防止バッグまたは使い捨ての静電気防止マットなどの帯電防止面に置きます。サーバーコンポーネントを取り扱うときは、シャーシの金属面に接続された静電気防止用アースストラップを着用してください。

関連情報

- [18 ページの「取り扱い上の注意事項」](#)

設置に必要な工具

- 長いプラスのねじ回し (Phillips の 2 番)

- カッターまたは丈夫なはさみ
- サインペンまたはテープ
- ESD マットおよびアースストラップ
- 油圧または機械式リフト (2 人で設定する場合はオプション)

さらに、次のいずれかのようなシステムコンソールデバイスを用意する必要があります。

- ASCII 端末
- ワークステーション
- 端末サーバー (初期ブート出力を取得するためのオプション)
- 端末サーバーに接続されたパッチパネル

関連情報

- [18 ページの「取り扱い上の注意事項」](#)
- [19 ページの「ESD 防止対策」](#)
- 『サーバーサービス』

サーバーを準備する



注意

リフトを使用せずに 1 人でサーバーを移動しようとしないでください。1 人で設置する場合は、すべてのコンポーネントを取り外し、リフトを使用する必要があります。2 人で設置する場合は、すべてのコンポーネントを取り外す必要がありますが、リフトの使用はオプションです。

1. サーバーを箱から取り出します。
[17 ページの「出荷用キット」](#)を参照してください。
2. すべてのプロセッサモジュール、メインモジュール、電源、ファンモジュール、および PCIe カードキャリアをサーバーから取り外します。
詳細な手順については、サービスマニュアルを参照してください。
3. 次の手順を判別します。
 - 1 人で設置する場合は、機械式リフトにサーバーを載せてください。
 - 2 人で設置する場合は、機械式リフトが使用できればサーバーをその上に載せてください。
4. PCIe カードキャリアに取り付ける必要があるすべての PCIe カードを取り付けます。
詳細な手順については、サービスマニュアルを参照してください。
5. ラックにサーバーを取り付けます。
[第5章](#)を参照してください。

関連情報

- [13 ページの「物理仕様」](#)
- [18 ページの「取り扱い上の注意事項」](#)
- [19 ページの「ESD 防止対策」](#)

- ・『サーバーサービス』

サーバーの設置

これらのトピックでは、角型取り付け穴付きキャビネットにサーバーを設置する方法を説明します。丸型取り付け穴付きキャビネットにサーバーを設置する場合は、[27 ページの「正しいラックマウント部品を選ぶ」](#)を参照してください。



注記

ラックマウントキットに説明書が付属している場合は、この章の手順ではなくキットの説明書の手順を使用してください。サーバーの取り付けを行ったら、[第7章](#)に進んで初回の電源投入を行ってください。

手順	説明	リンク
1	ラックがサーバーの要件を満たしていることを確認します。	23 ページの「ラックの互換性」
2	正しいラックマウント部品を選び、その部品を取り付けます。	27 ページの「正しいラックマウント部品を選ぶ」 28 ページの「ラックの取り付け位置にマークを付ける」 29 ページの「ラックマウント部品を取り付ける」
3	ラックにサーバーを取り付けます。	33 ページの「サーバーを設置する」
4	(オプション) CMA を取り付けます。	34 ページの「CMA の取り付け」
5	配線の要件とポートの情報を確認します。データケーブルと管理ケーブルをサーバーに接続します。	第6章
6	Oracle ILOM SP を構成し、サーバーに対して初回の電源投入を行います。	第7章

関連情報

- ・ [第2章](#)
- ・ [第6章](#)

ラックの互換性

ラックマウントキットは、次の規格を満たす装置ラックと互換性があります。

項目	要件
CMA で使用する場合のラックタイプ	1200 mm ラック
構造	前後左右で固定する形式の 4 ポストラック。2 ポストラックは互換性がありません。
ラックの横方向の開口部とユニットの縦方向のピッチ	ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 規格に適合すること。
ラックレール取り付け穴のサイズ	9.5 mm の四角穴および M6 丸型取り付け穴のみがサポートされています。7.2 mm、M5、10 - 32 の取り付け穴など、その他のすべてのサイズはサポートされていません。
前方と後方取り付け面の間の距離	最小: 24 in. (240 mm) 最大: 36 in. (915 mm)
前方取り付け面の手前のクリアランスの奥行き	キャビネット前面ドアまでの距離が最低 1 in. (25.4 mm) あること。
前方取り付け面の背後のクリアランスの奥行き	ケーブル管理アームを使用する場合は、キャビネット後面ドアまで最低 34.6 in. (878.8 mm) の間隔があること、ケーブル管理アームを使用しない場合は最低 31.5 in. (800 mm) あること。
前側取り付け面と後ろ側取り付け面の隙間の幅	構造的支柱とケーブルの溝の距離が最低 18.9 in. (480 mm) あること。
サーバーの寸法	奥行き: 31.5 in. (800 mm) 幅: 17.5 in. (445 mm) 高さ: 13.8 in. (350 mm)

関連情報

- [13 ページの「物理仕様」](#)
- [19 ページの「設置に必要な工具」](#)
- [26 ページの「ラックマウントキット」](#)
- [27 ページの「正しいラックマウント部品を選ぶ」](#)

ラックに関する注意事項



注意

装置の搭載: 上方が重くなり転倒することがないように、装置は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。装置の取り付け時にラックが転倒しないように、ラックの転倒防止バーを伸ばします。



注意

動作時周辺温度の上昇: 密閉されたラックアセンブリまたはマルチユニットのラックアセンブリにサーバーを設置している場合、ラック環境の動作時周辺温度が室内の周辺温度より高くなる場合があります。したがって装置は、サーバーに指定された最大周辺温度 (TMA) に適合する環境内にも設置してください。



注意

通気の低下: 装置をラックに取り付けて、装置が安全に動作するための十分な通気を得られるようにします。



注意

装置の配置: 装置をラックに取り付けて、重量が均等に分散されるようにします。装置の配置が不均等な場合、危険な状態になっている可能性があります。



注意

回路の過負荷: 電源装置の回路に過大な電流が流れないようにします。サーバーを電源回路に接続する前に、装置のラベルに示されている定格電力を確認し、回路の過負荷によって過電流保護や装置の配線にどのような影響があるかを検討します。



注意

安全なアース: ラックに搭載する装置は必ず安全にアースします。分岐回路への直接接続以外の電源接続（電源タップの使用など）の場合は、特に注意してください。



注意

スライドレールに搭載した装置を、シェルフや作業スペースとして使用しないでください。



注意

リフトを使用せずに 1 人でサーバーを移動しようとししないでください。1 人で設置する場合は、すべてのコンポーネントを取り外し、リフトを使用する必要があります。2 人で設置する場合は、すべてのコンポーネントを取り外す必要がありますが、リフトの使用はオプションです。



注意

サーバーは、重量があるため、ラックに入った状態で輸送しないでください。サーバーは最終的な場所でのみラックに取り付けてください。



注意

サーバーを取り付けたあとでラックを移動しようとししないでください。

関連情報

- [13 ページの「物理仕様」](#)
- [18 ページの「取り扱い上の注意事項」](#)
- [26 ページの「ラックを安定させる」](#)

ラックを安定させる



注意

作業員が負傷する危険性を低減するために、すべての転倒防止装置を伸ばしてラックを安定させてから、サーバーを取り付けます。

次の手順の詳細な説明については、ラックのドキュメントを参照してください。

1. ラックに関する注意事項を読み、ラックを安定させます。
[24 ページの「ラックに関する注意事項」](#)を参照してください。
2. ラックの前面ドアと背面ドアを開いて取り外します。
3. 取り付け中にラックキャビネットが転倒しないように、あらゆる転倒防止策を講じてキャビネットを安定させます。
4. 横転を防ぐための平行調整脚がラックの下部にある場合は、調整脚を床まで完全に伸ばします。

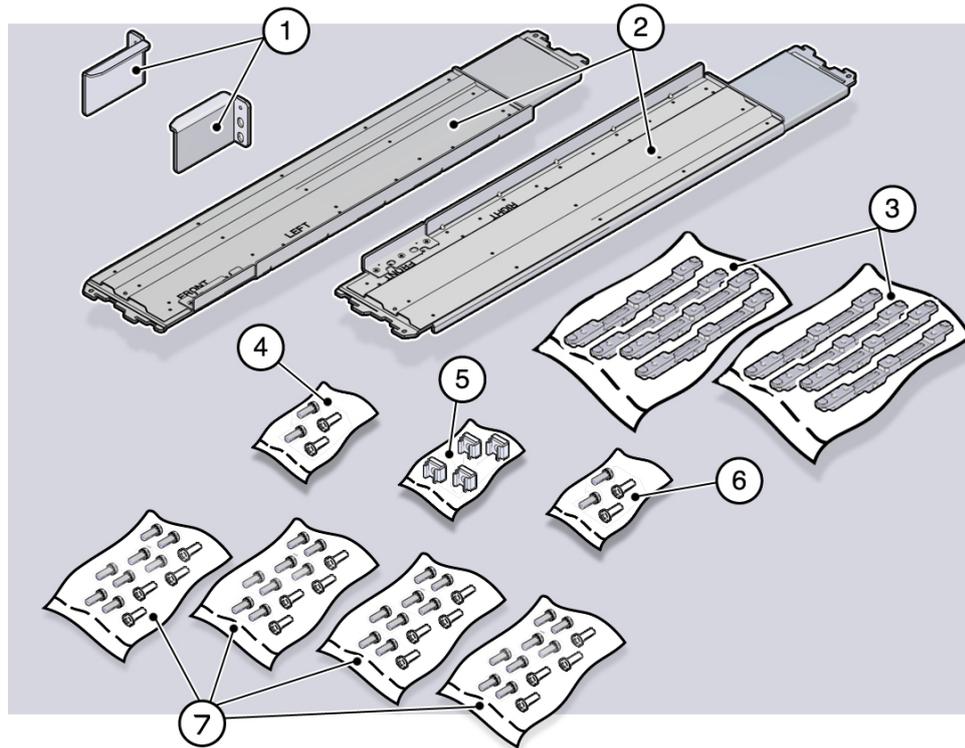
関連情報

- ラックのドキュメント
- サーバーの安全性とコンプライアンス
- [23 ページの「ラックの互換性」](#)
- [24 ページの「ラックに関する注意事項」](#)

ラックマウントキット

ラックマウントキットには、ラックの側面それぞれに 1 つずつ、合計 2 つのシェルフレールがあります。各シェルフレールには、「LEFT」か「RIGHT」のマークが付けられています。

シェルフレールは、4 つのアダプタ留め具でラックまたはキャビネットに取り付けます。シェルフレールは、奥行き 25 - 34.25 in. (63.5 - 87 cm) のラックに対応します。



番号	説明
1	上部背面留め具
2	シェルフレール
3	アダプタ留め具 (角型取り付け穴付きキャビネットと丸型取り付け穴付きキャビネット用に 2 種類が用意されている)
4	平頭ねじ
5	ねじ式インサート
6	M6 ねじ
7	ラックマウントねじ

関連情報

- [19 ページの「設置に必要な工具」](#)
- [29 ページの「ラックマウント部品を取り付ける」](#)
- [23 ページの「ラックの互換性」](#)
- [27 ページの「正しいラックマウント部品を選ぶ」](#)

正しいラックマウント部品を選ぶ

- ラックの取り付けに必要なハードウェアを特定します。

キャビネットの種類	必要なねじセット
角穴	SCREW, SEMS, M6 X 16 CAGENUTS, M6 SCREW, FLAT HEAD, M4 X 10

キャビネットの種類	必要なねじセット
丸穴 (10-32) (コーナーベゼル付き)	SCREW、SEMS、10-32 X 10
	SCREW、FLAT HEAD、M4 X 10
丸穴 (M6) (コーナーベゼル付き)	SCREW、SEMS、M6 X 12
	SCREW、FLAT HEAD、M4 X 10
丸穴 (10-32) (屋内設置)	SCREW、SHOULDER、10-32
	SCREW、FLAT HEAD、M4 X 10
丸穴 (M6) (屋内設置)	SCREW、SEMS、M6 X 12
	SCREW、FLAT HEAD、M4 X 10



注記

キットに含まれているねじセットのいくつかは、このサーバーの設置には必要ありません。

関連情報

- [23 ページの「ラックの互換性」](#)
- [28 ページの「ラックの取り付け位置にマークを付ける」](#)
- [29 ページの「ラックマウント部品を取り付ける」](#)

ラックの取り付け位置にマークを付ける

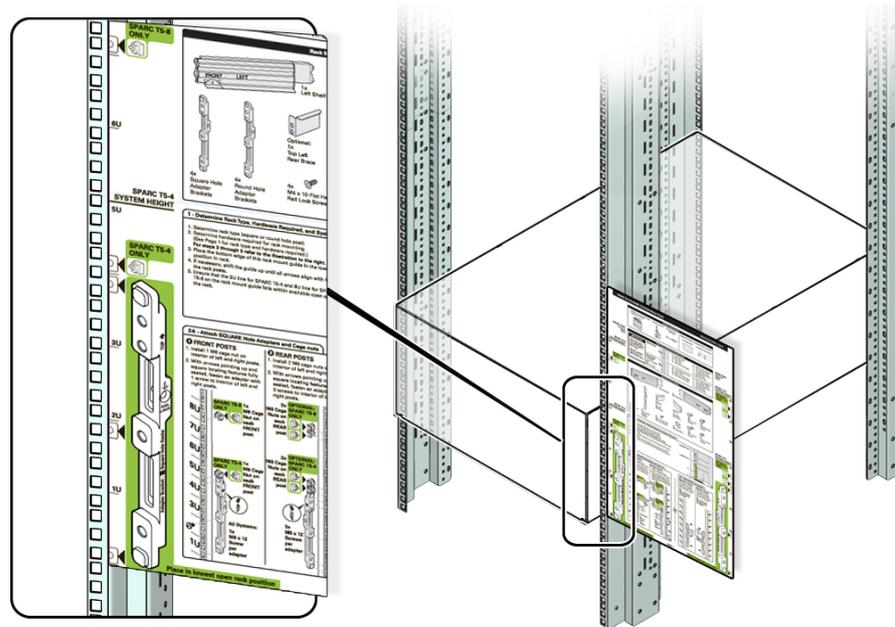
ラック調整テンプレートを使用して、シェルフレールを取り付けるための正しい取り付け穴を特定します。



注記

ラックには下から上に搭載してください。

1. サーバーを設置できるだけ十分な縦方向のスペースがラック内にあることを確認します。
2. ラックマウントテンプレートを前面のレールに合わせます。
テンプレート下端がサーバーの底に当たります。テンプレート下端から上に高さを測ります。



3. 前面のシェルフレールを取り付ける取り付け穴にマークを付けます。
4. 背面のシェルフレールを取り付ける取り付け穴にマークを付けます。

関連情報

- [23 ページの「ラックの互換性」](#)
- [27 ページの「正しいラックマウント部品を選ぶ」](#)
- [29 ページの「ラックマウント部品を取り付ける」](#)

ラックマウント部品を取り付ける

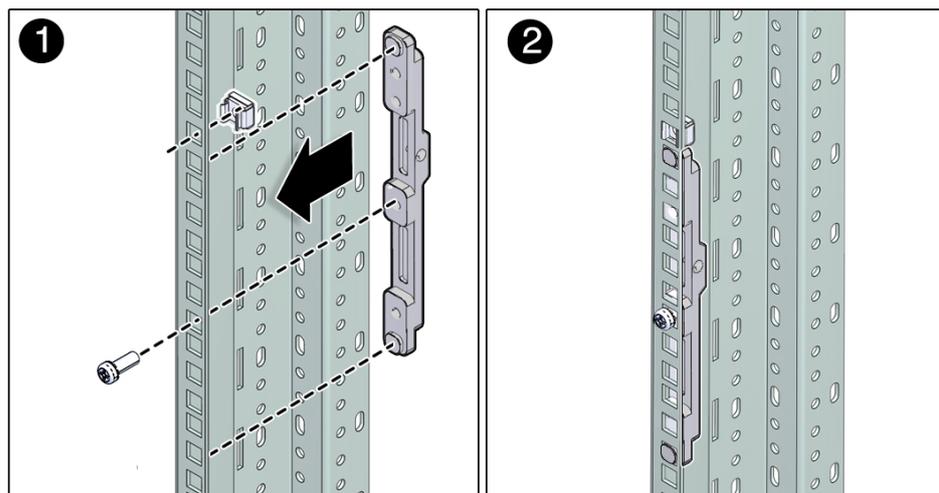
1. 左前面および右前面のmountポイントごとに、次の手順を繰り返します。
 - a. アダプタ留め具をマークした場所に配置します。



注記

「上」矢印は正しい方向を示しています。

- b. Phillips の 2 番のねじを 1 本使用して、中央の穴でアダプタ留め具を固定します。
- c. ラックレール留め具のすぐ上の穴に取り付けクリップを差し込みます。



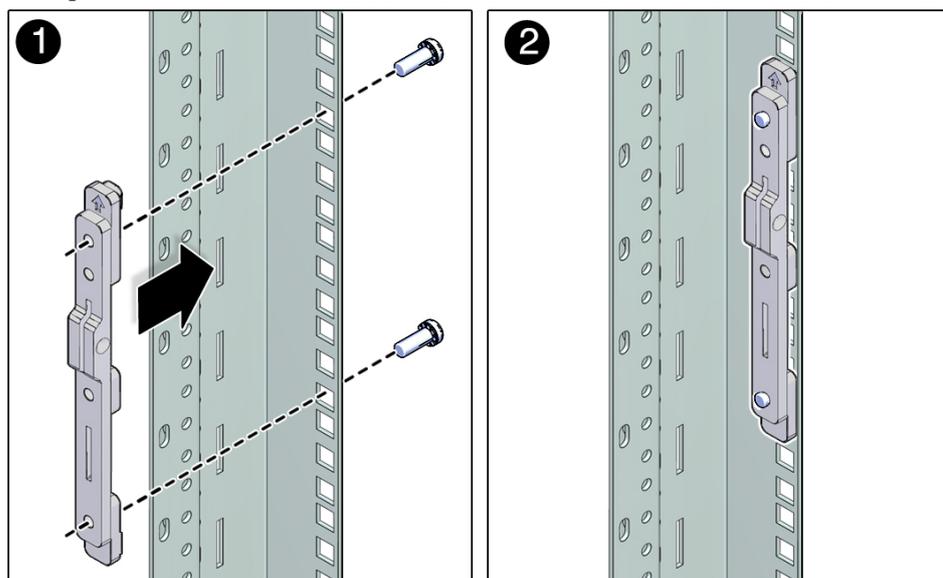
2. 左右それぞれの背面取り付け位置に対して、次の手順を実行します。
 - a. アダプタ留め具をマークした場所に配置します。



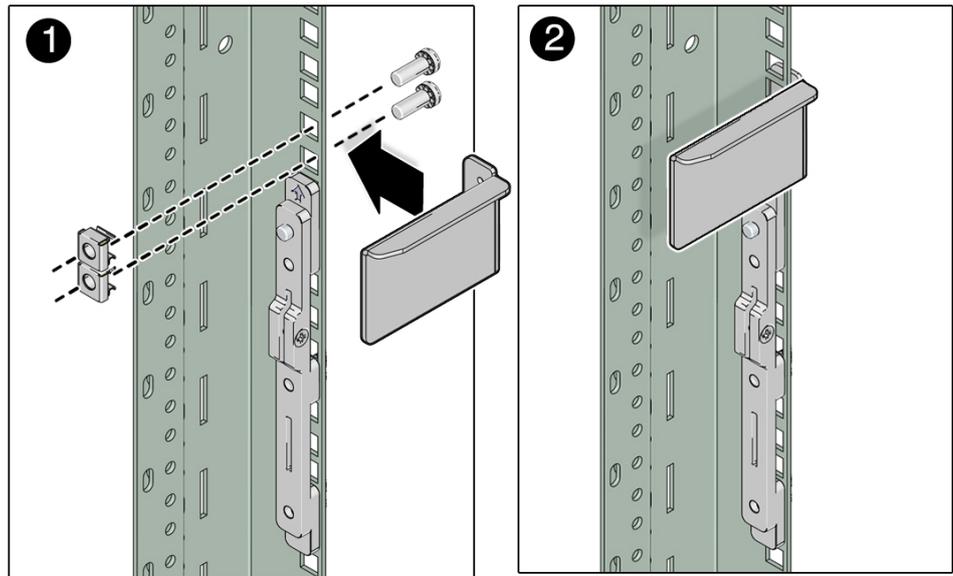
注記

「上」矢印は正しい方向を示しています。

- b. Phillips の 2 番のねじを 2 本使用して、アダプタ留め具の上と下の穴を固定します。



3. 左右の上部コーナー留め具を取り付けます。
 - a. 2 つのケージナットを、ラックのアダプタ留め具の上の 2 つの穴に差し込みます。



- b. Phillips の 2 番のねじを 2 本使用して、上部コーナー留め具をそれぞれ固定します。
4. シェルフレールを取り付けます。



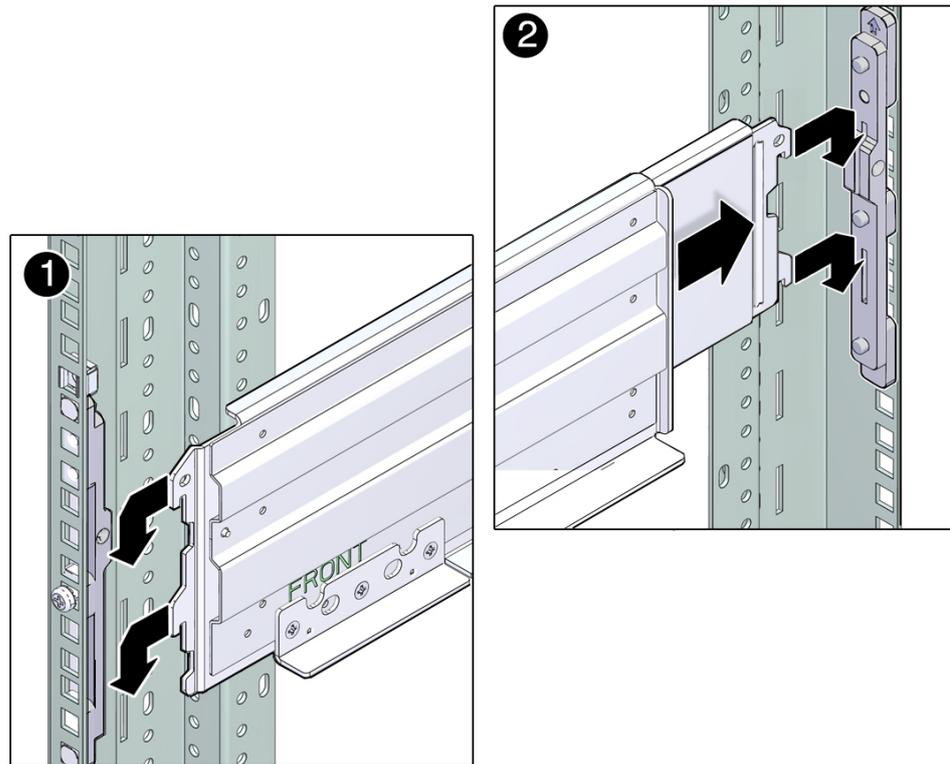
注記

シェルフレールには、サーバー前面から見た場合の位置で「Left」または「Right」、「Front」または「Rear」と書かれています。

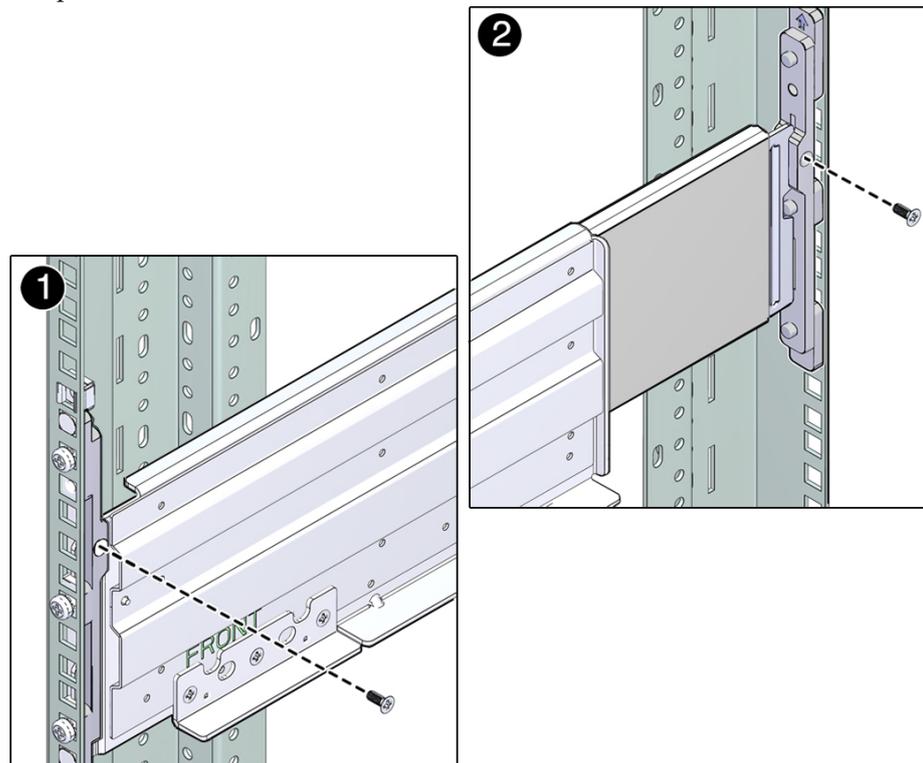
左右のシェルフレールに対して次を繰り返します。

- a. シェルフレールの前面を前面アダプタ留め具に差し込みます。
- b. シェルフレールの背面を背面アダプタ留め具に差し込みます。

シェルフレールは、キャビネットの奥行きに合わせてスライドさせることができます。



c. Phillips の 2 番の平頭ねじを 2 本使用して、シェルフレールをそれぞれ固定します。



関連情報

- [23 ページの「ラックの互換性」](#)
- [24 ページの「ラックに関する注意事項」](#)

- ・ 26 ページの「ラックマウントキット」

サーバーを設置する



注意

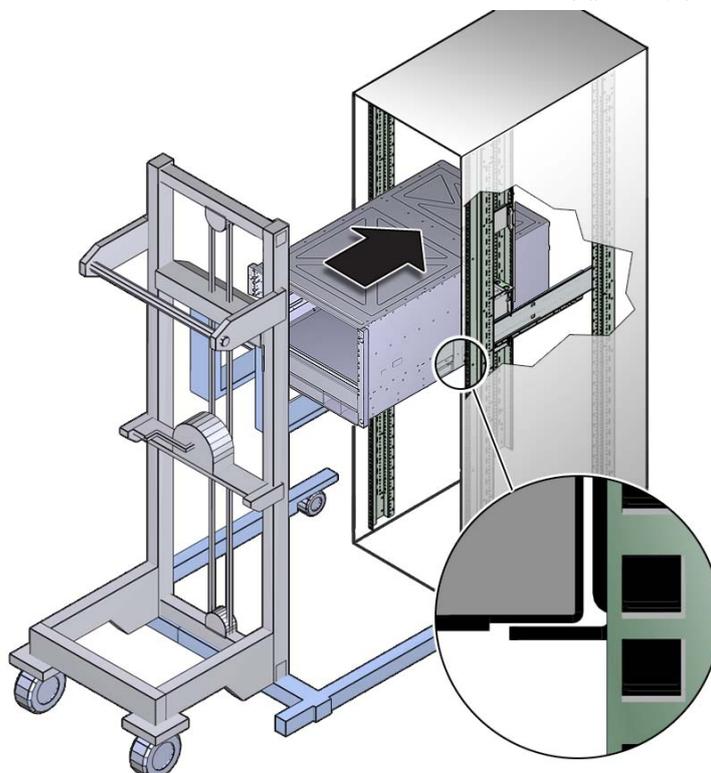
リフトを使用せずに 1 人でサーバーを移動しようとししないでください。1 人で設置する場合は、すべてのコンポーネントを取り外し、リフトを使用する必要があります。2 人で設置する場合は、すべてのコンポーネントを取り外す必要がありますが、リフトの使用はオプションです。



注意

サーバーを取り付けたあとでラックを移動しようとししないでください。

1. サーバーの設置前に、プロセッサモジュール、メインモジュール、電源、ファンモジュール、PCIe カードキャリアをすべて取り外していることを確認します。
これらのコンポーネントを取り外す方法については、サービスマニュアルを参照してください。
2. 機械式リフトを使用している場合は、リフトが水平で安定していることを確認します。
3. サーバーを正しい高さまで持ち上げます。
4. サーバーをラック内にスライドさせます。
サーバーの底がラックレールの底よりも上にあることを確認します。



5. Phillips の 2 番のねじを 4 本使用して、フロントパネルをサーバーに固定します。
6. 取り外したコンポーネントをすべて元どおりに取り付けます。

これらのコンポーネントを取り付ける方法については、サービスマニュアルを参照してください。

関連情報

- [23 ページの「ラックの互換性」](#)
- [24 ページの「ラックに関する注意事項」](#)
- [26 ページの「ラックを安定させる」](#)
- [26 ページの「ラックマウントキット」](#)

CMA の取り付け

ケーブル管理部品は、サーバー背面に接続された電源ケーブルとデータケーブルを管理および配線するためのオプションのキットです。



注記

CMA が取り付けられたこのサーバーは、1200 mm ラックにのみ適合します。

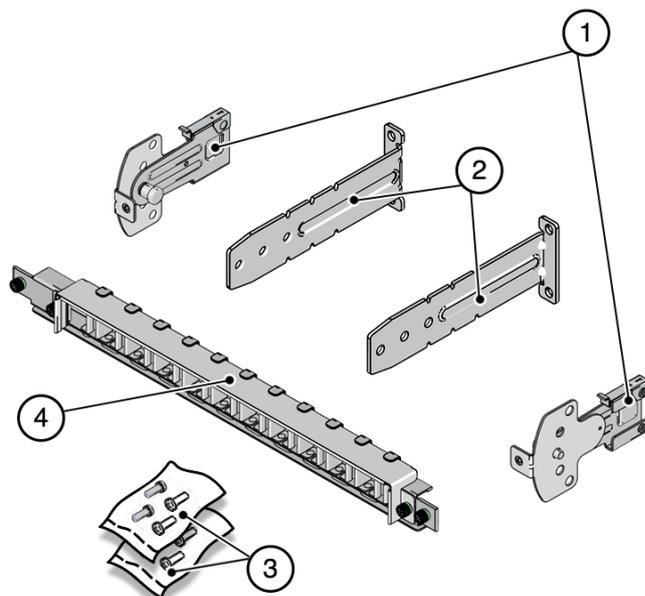
これらのトピックは、CMA を取り付けるために必要な情報とタスクについて説明します。

- [35 ページの「CMA キット」](#)
- [35 ページの「正しい CMA 部品を選ぶ」](#)
- [36 ページの「CMA を取り付ける」](#)
- [44 ページの「CMA を使用してケーブルを固定する」](#)

関連情報

- [26 ページの「ラックマウントキット」](#)
- [35 ページの「CMA キット」](#)
- [44 ページの「CMA を使用してケーブルを固定する」](#)

CMA キット



番号	説明
1	回転式留め具
2	L字型留め具
3	ねじ
4	CMA

関連情報

- [35 ページの「正しい CMA 部品を選ぶ」](#)
- [36 ページの「CMA を取り付ける」](#)
- [44 ページの「CMA を使用してケーブルを固定する」](#)

正しい CMA 部品を選ぶ

- CMA の取り付けに必要なハードウェアを特定します。

キャビネットの種類	必要なねじセット
角穴	SCREW、SEMS、M6 X 16
丸穴 (M6) (すべての種類)	
丸穴 (10-32) (すべての種類)	SCREW、SEMS、10-32 X 7/16"



注記

キットに含まれているねじセットのいくつかは、このサーバーの設置には必要ありません。

関連情報

- [35 ページの「CMA キット」](#)
- [36 ページの「CMA を取り付ける」](#)

CMA を取り付ける

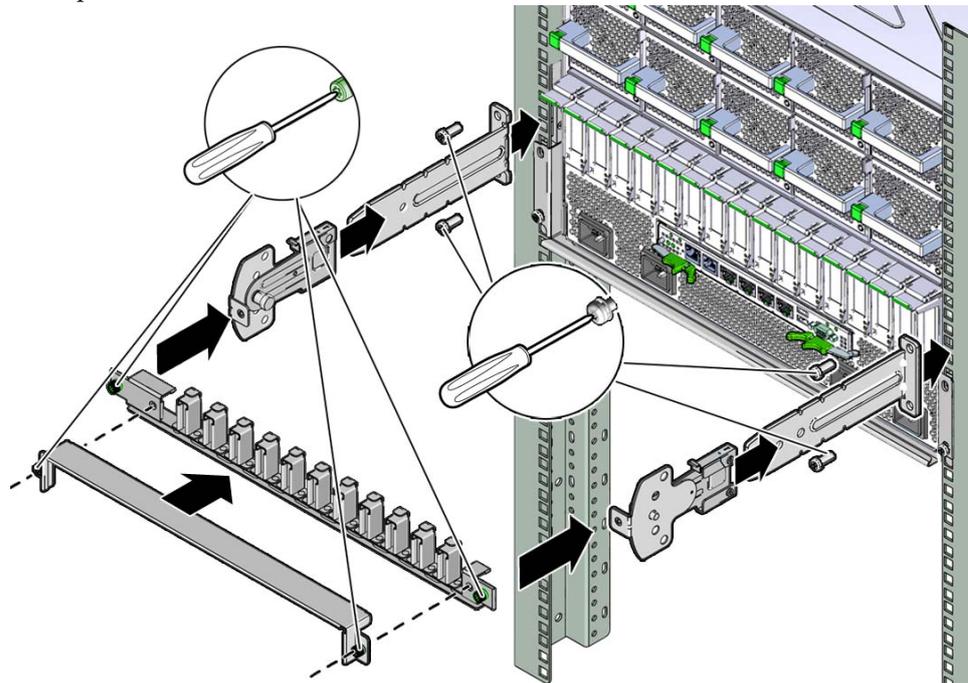
CMA はサーバーの背面中央に取り付けます。



注記

CMA の取り付けによって、キャビネットの電源差込口のいくつかがふさがれて使用できなくなる場合があります。

1. ラックにサーバーを取り付ける前に取り外していたすべてのコンポーネントを元どおりに取り付けていることを確認します。
これらのコンポーネントを取り付ける方法については、サービスマニュアルを参照してください。
2. L 字型留め具を背面に取り付けます。
留め具には、サーバー背面から見た場合の位置で「Left」または「Right」というマークが付けられています。
左側と右側に対して次を繰り返します。
 - a. それぞれ左右どちらの留め具かを確認します。
 - b. ラックマウントアダプタから真ん中の 2 本のねじを外します。
 - c. 中央の 2 つの取り付け穴の上に留め具を配置します。
 - d. Phillips の 2 番のねじを 2 本使用して、固定部品をそれぞれ固定します。



3. 左右の回転式留め具を左右の L 字型留め具に差し込みます。
4. 2 本の拘束ねじで CMA を固定します。

関連情報

- [35 ページの「CMA キット」](#)
- [35 ページの「正しい CMA 部品を選ぶ」](#)

サーバーケーブルの接続

これらのタスクでは、サーバーをブートする前に、ネットワークおよびシリアルポートを接続して構成するタスクについて説明します。

手順	説明	リンク
1	ケーブルの要件を確認します。	37 ページの「配線の要件」
2	フロントパネルと背面パネルのコネクタおよびポートを確認します。	11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」 11 ページの「背面パネルのコンポーネント」 38 ページの「ポートの識別」
3	管理ケーブルおよびデータケーブルを接続します。	42 ページの「データケーブルおよび管理ケーブルの接続」
4	CMA にケーブルを固定します。	44 ページの「CMA を使用してケーブルを固定する」

関連情報

- [第2章](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [第5章](#)
- [第7章](#)

配線の要件

- サーバーの最小のケーブル接続:
 - サーバーのシステムボード上の 1 つ以上の Ethernet ネットワーク接続 (NET ポート)
 - シリアル管理ポート (SER MGT ポート): OBP 出力を伴う SP ローカル接続
 - ネットワーク管理ポート (NET MGT ポート): OBP 出力を伴わない SP リモート接続
 - サーバー電源装置の電源ケーブル
- **SP 管理ポート:** ILOM SP で使用できる SP 管理ポートは 2 つあります。
 - SER MGT ポートは、RJ-45 ケーブルを使用し、常に使用可能です。このポートは、ILOM SP へのデフォルトの接続です。
 - NET MGT ポートは、ILOM SP へのオプションの接続です。NET MGT ポートは、DHCP をデフォルトで使用するよう構成されています。静的 IP アドレスを設定するには、[57](#)

ページの「静的 IP アドレスの SP への割り当て」を参照してください。SP ネットワーク管理ポートでは、10/100 BASE-T 接続用に RJ-45 ケーブルを使用します。

- Ethernet ポートには、NET0、NET1、NET2、および NET3 のラベルが付いています。Ethernet インタフェースは、100M ビット/秒、1000M ビット/秒、および 10000M ビット/秒で動作します。

接続タイプ	IEEE 用語	転送速度
Fast Ethernet	100BASE-T	100M ビット/秒
ギガビット Ethernet	1GBASE-T	1000M ビット/秒
10 ギガビット Ethernet	10GBASE-T	10000M ビット/秒



注記

10GBase-T の速度には、最低でも、カテゴリ 5E ケーブルが必要です。定格最大距離 100 m までの 10GBase-T の速度には、最低でもカテゴリ 6A のケーブルが必要です。

- USB ポート: USB ポートはホットプラグをサポートします。サーバーの動作中でも、サーバーの動作に影響を与えることなく USB ケーブルや周辺デバイスを接続および切断できます。
- OS の動作中にのみ、USB ホットプラグ処理を実行できます。サーバーの **ok** プロンプトの表示中、およびシステムのブートが完了するまでは、USB ホットプラグ処理はサポートされていません。
- 4 つの USB コントローラには、それぞれデバイスを 126 台まで接続でき、1 つのサーバーにつき合計 504 台の USB デバイスを接続できます。
- AC 電源ケーブル: データケーブルの接続が完了し、サーバーをシリアル端末または端末エミュレータ (PC またはワークステーション) に接続するまでは、電源ケーブルを電源装置に接続しないでください。AC 電源ケーブルを電源に接続するとすぐに、サーバーがスタンバイモードになり、Oracle ILOM SP が初期化されます。システムサーバーが端末、PC、ワークステーションに接続していない場合、メッセージは表示されません。

関連情報

- [43 ページの「SER MGT ケーブルを接続する」](#)
- [43 ページの「NET MGT ケーブルを接続する」](#)
- [44 ページの「Ethernet ネットワークケーブルを接続する」](#)
- [47 ページの「電源コードを準備する」](#)

ポートの識別

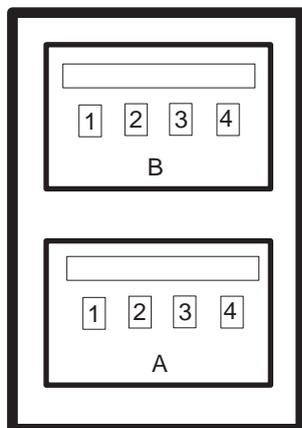
- [39 ページの「USB ポート」](#)
- [39 ページの「SER MGT ポート」](#)
- [40 ページの「NET MGT ポート」](#)
- [41 ページの「ギガビット Ethernet ポート」](#)
- [41 ページの「VGA ポート」](#)

関連情報

- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [37 ページの「配線の要件」](#)
- [42 ページの「データケーブルおよび管理ケーブルの接続」](#)

USB ポート

2 つの USB 3.0 ポートが背面パネルにあります。このほかに、メインモジュールにも USB 3.0 ポートが 2 つあり、フロントパネルからアクセスできます。[11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)および [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)で、USB ポートの位置を確認してください。USB ポートは、ホットプラグをサポートします。サーバーの動作中でも、サーバーの動作に影響を与えることなく USB ケーブルや周辺デバイスを接続および切断できます。



ピン	信号の説明	ピン	信号の説明
A1	+5 V (ヒューズ付き)	B1	+5 V (ヒューズ付き)
A2	USB0/1-	B2	USB2/3-
A3	USB0/1+	B3	USB2/3+
A4	アース	B4	アース

関連情報

- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [37 ページの「配線の要件」](#)
- [42 ページの「データケーブルおよび管理ケーブルの接続」](#)

SER MGT ポート

SER MGT RJ-45 ポートは背面パネルにあり、SP への TIA/EIA-232 シリアル Oracle/Cisco 標準接続を提供します。このポートは、Oracle ILOM システムコントローラへのデフォルトの接続です。DTE 間の通信では、標準の RJ-45 ケーブルとともに付属の RJ-45/DB-9 クロスアダプタ

を使用すると、必要なヌルモデム構成を実現できます。[11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)を参照してください。

このほかに、メインモジュールにも SER MGT ポートが 1 つあり、フロントパネルからアクセスできます。[11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)を参照してください。



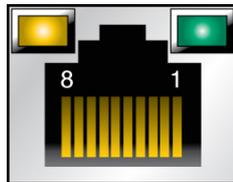
ピン	信号の説明	ピン	信号の説明
1	送信要求	5	アース
2	データ端末レディー	6	受信データ
3	送信データ	7	データセットレディー
4	アース	8	送信可

関連情報

- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [43 ページの「SER MGT ケーブルを接続する」](#)
- [48 ページの「SER MGT ポートに端末またはエミュレータを接続する」](#)

NET MGT ポート

背面パネルにある NET MGT RJ-45 ポートは、SP へのオプションの Ethernet 接続を提供します。NET MGT ポートは、Oracle ILOM SP へのオプションの接続です。SP NET MGT ポートでは、10/100 BASE-T 接続用に RJ-45 ケーブルを使用します。DHCP サーバーを使用しないネットワークでは、SER MGT ポートを通してネットワーク設定を構成するまで、このポートにアクセスできません。[11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)を参照してください。



ピン	信号の説明	ピン	信号の説明
1	送信データ +	5	コモンモードの終了
2	送信データ -	6	受信データ -
3	受信データ +	7	コモンモードの終了
4	コモンモードの終了	8	コモンモードの終了

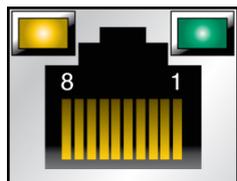
関連情報

- [10 ページの「サーバーの概要」](#)

- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [43 ページの「NET MGT ケーブルを接続する」](#)
- [58 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」](#)

ギガビット Ethernet ポート

4 つの RJ-45 10 ギガビット Ethernet ポート (NET0、NET1、NET2、NET3) はシステム背面パネルにあります。[11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)を参照してください。Ethernet インタフェースは 100M ビット/秒、1000M ビット/秒、および 10000M ビット/秒で動作します。



ピン	信号の説明	ピン	信号の説明
1	送信/受信データ 0 +	5	送信/受信データ 2 -
2	送信/受信データ 0 -	6	送信/受信データ 1 -
3	送信/受信データ 1 +	7	送信/受信データ 3 +
4	送信/受信データ 2 +	8	送信/受信データ 3 -

関連情報

- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [44 ページの「Ethernet ネットワークケーブルを接続する」](#)

VGA ポート

サーバーには、2 つの 15 ピン VGA ビデオポートがあり、一方のポートはサーバーのフロントに、もう一方はバックにあります。[11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)および [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)を参照してください。DB-15 ビデオケーブルを使用してビデオアダプタに接続し、必要な接続を実現します。サポートする最大解像度は 1024 x 768 です。



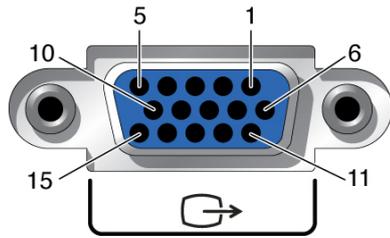
注記

一度に使用できるポートは、2 つのうち一方だけです。背面の VGA ポートはデフォルトで無効になっています。背面ポートを有効にして前面ポートを無効にするには、Oracle ILOM VGA_REAR_PORT ポリシーを有効にする必要があります。-> **set /SP/policy VGA_REAR_PORT=enabled.**



注記

モニターと VGA ポートの接続に使用するケーブルの長さは 6 m を超えないようにしてください。



ピン	信号の説明	ピン	信号の説明
1	赤ビデオ	9	[KEY]
2	緑ビデオ	10	同期アース
3	青ビデオ	11	モニター ID - ビット 1
4	モニター ID - ビット 2	12	VGA 12C シリアルデータ
5	アース	13	水平同期
6	赤アース	14	垂直同期
7	緑アース	15	VGA 12C シリアルクロック
8	青アース		

関連情報

- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [37 ページの「配線の要件」](#)
- [第6章](#)

データケーブルおよび管理ケーブルの接続

これらのケーブルを接続したら、AC 電源コードを接続する前に、[第7章](#)を参照してください。



注意

サーバー付属の電源コードのみを使用してください。

- [43 ページの「SER MGT ケーブルを接続する」](#)
- [43 ページの「NET MGT ケーブルを接続する」](#)
- [44 ページの「Ethernet ネットワークケーブルを接続する」](#)
- [44 ページの「その他のデータケーブルを接続する」](#)

関連情報

- [11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [37 ページの「配線の要件」](#)
- [38 ページの「ポートの識別」](#)

SER MGT ケーブルを接続する

SP のシリアル管理ポートには、SER MGT のマークが付いています。コネクタの場所については、[11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)および [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)を参照してください。

- SP SER MGT ポートから端末デバイスに RJ-45 ケーブル (カテゴリ 5) を接続します。サーバーの初期管理にこのポートを使用してください。このポートは、[第7章](#)で述べているように、NET MGT ポートをアクティブ化する場合に必要です。DB-9 または DB-25 ケーブルのどちらかを接続する場合、アダプタを使用して、コネクタごとに指定されたクロスオーバーを実行します。



注記

SP SER MGT ポートはサーバー管理にのみ使用されます。これは、SP と端末またはコンピュータとのデフォルトの接続です。



注意

このポートにモデムを接続しないでください。

関連情報

- [37 ページの「配線の要件」](#)
- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [48 ページの「SER MGT ポートに端末またはエミュレータを接続する」](#)

NET MGT ケーブルを接続する

SP ネットワーク管理ポートには NET MGT というラベルが付けられています。サーバーの初期構成を行なったあとで、この NET MGT ポートを使用すると、Ethernet ネットワーク経由で SP に接続できます。

DHCP サーバーを使用して IP アドレスを割り当てるネットワークの場合は、DHCP サーバーによって、この NET MGT ポートに IP アドレスが割り当てられます。この IP アドレスにより、SSH 接続を使用して SP に接続できます。DHCP を使用しないネットワークでは、SER MGT ポートを通してネットワーク設定を構成するまで、この NET MGT ポートにアクセスできません。手順については、[58 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」](#)を参照してください。

- カテゴリ 5 (またはこれ以上) ケーブルを使用して、NET MGT ポートをネットワークスイッチまたはハブに接続します。コネクタの場所については、[を参照してください](#)。[48 ページの「SER MGT ポートに端末またはエミュレータを接続する」](#)で説明するように、SER MGT ポートを介してネットワーク設定を構成するまで、NET MGT ポートは動作しません。



注記

NET MGT ポートは、デフォルトでは DHCP を介してネットワーク設定を取得し、SSH を使用した接続を有効にするように構成されています。使用しているネットワークに合わせて、これらの設定の変更が必要になる場合があります。これらの設定の変更に関連した情報は、にあります。

関連情報

- [48 ページの「SER MGT ポートに端末またはエミュレータを接続する」](#)
- [39 ページの「SER MGT ポート」](#)

Ethernet ネットワークケーブルを接続する

サーバーには、NET0、NET1、NET2、および NET3 というマークの付けられた 4 つのネットワークコネクタがあります。これらのポートを使用して、サーバーをネットワークに接続します。Ethernet インタフェースは、100M ビット/秒、1000M ビット/秒、および 10000M ビット/秒で動作します。ポートの場所については、[11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)を参照してください。



注記

Oracle ILOM サイドバンド管理機能により、これらの Ethernet ポートの 1 つを使用すると、SP にアクセスできます。手順については、サーバーの管理ガイドを参照してください。

1. カテゴリ 5 (またはこれ以上) のケーブルを、ネットワークスイッチまたはハブからシャーシの背面にある Ethernet ポート 0 (NET0) に接続します。
2. 必要に応じて、カテゴリ 5 (またはこれ以上) のケーブルをネットワークスイッチまたはハブから残りの Ethernet ポート (NET1、NET2、NET3) に接続します。

関連情報

- 『サーバー管理』
- [第7章](#)

その他のデータケーブルを接続する

- サーバーにその他の I/O コンポーネントが構成されている場合は、外部ケーブルをサーバーに接続します。
手順については、周辺機器のドキュメントを参照してください。

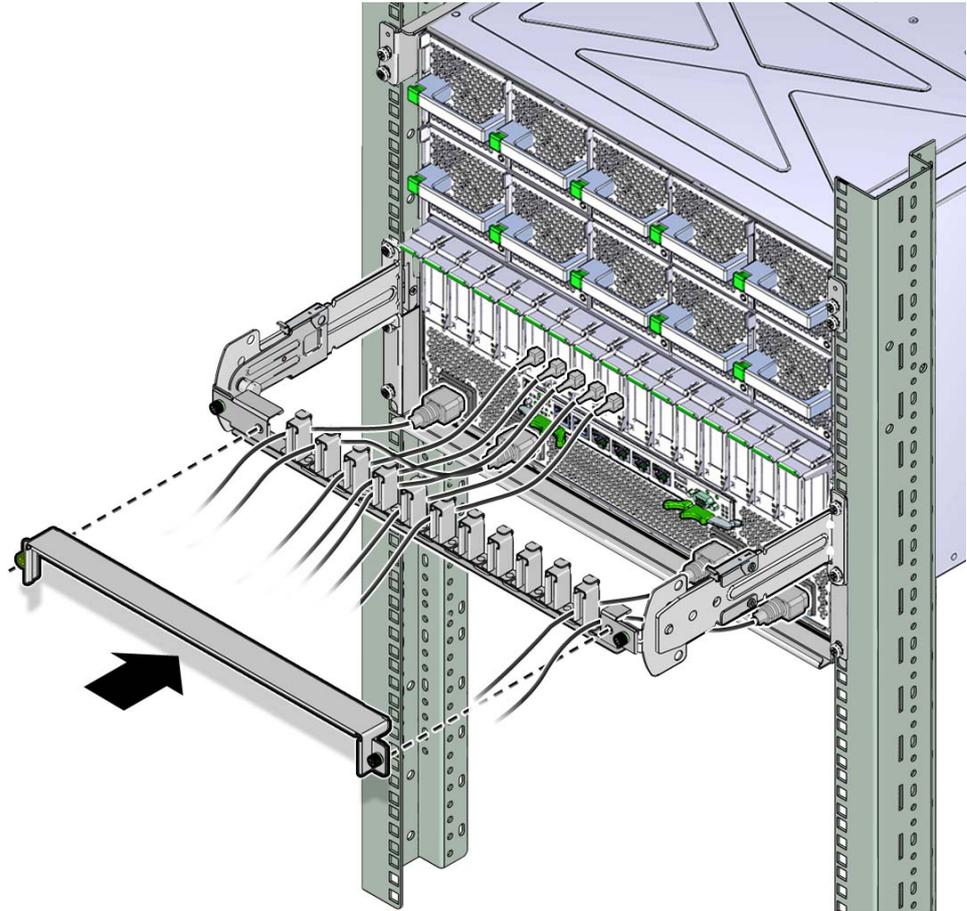
関連情報

- PCIe カードのドキュメント
- 『サーバーサービス』

CMA を使用してケーブルを固定する

CMA を使用してケーブルを固定し、ケーブルが正しく配線されるようにします。

1. CMA カバーを取り外します。
CMA カバーは、Phillips の 2 番のねじ 2 本で固定されています。



2. システムケーブルを CMA の適切なスロットに配置します。
[第6章](#)を参照してください。
3. CMA カバーを取り付けます。
Phillips の 2 番のねじを 2 本使用して、カバーを固定します。

関連情報

- [35 ページの「CMA キット」](#)
- [37 ページの「配線の要件」](#)

サーバーへの初めての電源投入

これらのトピックでは、はじめてサーバーに電源を投入し、Oracle Solaris OS を構成する手順について説明します。

手順	説明	リンク
1	電源コードを準備します。	47 ページの「電源コードを準備する」
2	SER MGT ポートにシリアル端末デバイスまたは端末サーバーを接続します。	48 ページの「SER MGT ポートに端末またはエミュレータを接続する」
3	サーバーの電源を投入し、Oracle ILOM システムコンソールを起動します。	49 ページの「はじめてシステムの電源を入れる」 または 52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」
4	プリインストールされている OS を構成するか、または新規 OS をインストールします。	52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」 または 54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM Web インタフェース)」
5	Oracle Solaris OS の構成パラメータを設定します。	56 ページの「Oracle Solaris OS の構成パラメータ」
6 (オプション)	静的 IP アドレスを使用するように NET MGT ポートを構成します。	57 ページの「静的 IP アドレスの SP への割り当て」

関連情報

- [第2章](#)
- [第5章](#)
- [第6章](#)

電源コードを準備する

電源コードを AC 電源からサーバーに配線して準備します。



注意

サーバー付属の電源コードのみを使用してください。



注意

サーバーをシリアル端末または端末エミュレータ (PC またはワークステーション) に接続するまで、電源ケーブルを電源装置に接続しないでください。電源ケーブルで電源装置を外部電源に接続すると同時に、サーバーはスタンバイモードになり、Oracle ILOM SP が初期化されます。電源を投入する前に端末または端末エミュレータを SER MGT ポートに接続していないと、システムメッセージは 60 秒後に表示されなくなる可能性があります。



注記

同時に両方の電源装置が接続されていない場合は、非冗長の状態になるため、Oracle ILOM がフォルト発生を通知します。このような状況では、この障害は気にしないでください。

- AC 電源からサーバー背面に電源コードを配線します。
この時点では、電源コードを電源装置に接続しないでください。

関連情報

- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [第7章](#)

SER MGT ポートに端末またはエミュレータを接続する

はじめてサーバーに電源を投入する前に、端末または端末エミュレータから SP へのシリアル接続を確立します。このシリアル接続を行うと、電源コードの接続時にシステムメッセージを確認できます。

1. 次のタスクを済ませていることを確認します。
 - a. 設置の準備を完了した。
[第4章](#)を参照してください。
 - b. サーバーのラックへの設置を完了した。
[第5章](#)を参照してください。
 - c. 必要なケーブルを接続した。
[第6章](#)を参照してください。
2. 端末または端末エミュレータ (PC またはワークステーション) をサーバーの SER MGT ポートに接続します。
3. 端末または端末エミュレータはこれらの設定で構成します。
 - 9600 ボー
 - 8 ビット
 - パリティなし
 - 1 ストップビット
 - ハンドシェイクなし

ヌルモデム構成が必要です。つまり、DTE 間の通信で送受信の信号が逆になるようにクロスされます。標準の RJ-45 ケーブルとともに付属の RJ-45 クロスアダプタを使用すると、ヌルモデム構成を実現できます。



注記

サーバーにはじめて電源を入れるときに端末または端末エミュレータ (PC またはワークステーション) が SER MGT ポートに接続されていないと、システムメッセージを確認できません。

4. (オプション) サーバーの NET MGT ポートと、SP およびホストにあとで接続されるネットワークとを、Ethernet ケーブルで接続します。
SER MGT ポートを通してはじめてシステムを構成します。初期構成のあと、この Ethernet インタフェースを介して SP とホストの間の通信を設定できます。
5. サーバーの NET ポートの 1 つと、サーバーが通信するネットワークとを、Ethernet ケーブルで接続します。
6. 電源コードを電源装置および別個の電源に接続します。
電源コードが接続されると、SP が初期化され、電源装置 LED が点灯します。数分後、SP ログインプロンプトが端末デバイスに表示されます。この時点では、ホストは初期化されておらず、電源も入っていません。
7. サーバーにはじめて電源を入れて取り付けを続けます。
[49 ページの「はじめてシステムの電源を入れる」](#)を参照してください。

関連情報

- [43 ページの「SER MGT ケーブルを接続する」](#)
- [52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)

はじめてシステムの電源を入れる

1. 端末デバイスで、パスワード **changeme** を使用して、**root** として SP にログインします。

```
XXXXXXXXXXXXXXXXX login: root
Password: changeme
. . .
->
```

しばらくすると、Oracle ILOM プロンプト (->) が表示されます。最適なセキュリティのために、root パスワードは変更してください。パスワードの変更、アカウントの追加、アカウント権限の設定などの管理タスクの詳細については、Oracle ILOM のドキュメントを参照してください。



注記

デフォルトでは、SP は DHCP を使用して IP アドレスを取得するように構成されています。静的 IP アドレスを SP に割り当てる予定の場合は、[58 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」](#)で手順を参照してください。

2. 次のいずれかの方法でサーバーに電源を投入します。
 - 電源ボタンを押します。
 - Oracle ILOM プロンプトで、次を入力します。

```
-> start /System
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
```

サーバーの初期化は、完了するまでに数分かかることがあります。

初期化を取り消すには、#.(シャープ + ピリオド) キーを押して Oracle ILOM プロンプトに戻ります。続いて、**stop /System** と入力します



注記

Oracle ILOM 3.1 で、/SYS の名前空間が /System に置き換えられます。従来の名前は、いつでもコマンドで使用できますが、出力で従来の名前を表示するには、-> set /SP/cli legacy_targets=enabled でこの名前を有効にする必要があります。詳細については、Oracle ILOM 3.1 ドキュメントを参照してください。

3. (オプション) ホスト出力をシリアル端末デバイスに表示するようにリダイレクトします。

```
-> start /HOST/console
Are you sure you want to start /SP/console (y/n)? y
Serial console started.
. . .
```

4. (オプション) サーバーの初期化中、他の Oracle ILOM コマンドを実行できます。
 - a. Oracle ILOM プロンプトを表示するには、#.(シャープ + ピリオド) キーを押します。
 - b. 使用可能な Oracle ILOM コマンドに関する情報を表示するには、**help** と入力します
特定のコマンドに関する情報を表示するには、**help command-name** と入力します
 - c. サーバーの初期化からホスト出力の表示に戻るには、次を入力します。

```
-> start /HOST/console
```

5. OS をインストールして設置を続けます。
[52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)を参照してください。

関連情報

- [43 ページの「SER MGT ケーブルを接続する」](#)
- [51 ページの「Oracle ILOM システムコンソール」](#)
- [52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)

- [52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)

Oracle ILOM システムコンソール

システムに最初に電源が投入されると、Oracle ILOM システムコンソールの制御下でブートプロセスが開始します。システムコンソールには、システムの起動中に実行されるファームウェアベースのテストで生成されたステータスメッセージおよびエラーメッセージが表示されます。



注記

これらのステータスメッセージとエラーメッセージを確認するには、サーバーの電源を入れる前に、SER MGT に端末または端末エミュレータを接続します。

システムコンソールによる低レベルのシステム診断が完了すると、SP が初期化され、より高いレベルの診断が実行されます。SER MGT ポートに接続されているデバイスを使用して SP にアクセスすると、Oracle ILOM 診断の出力が表示されます。

デフォルトでは、SP は DHCP を使用してネットワーク構成設定を取得し、SSH を使用した接続を許可するように、NET MGT ポートを自動的に構成します。

システムコンソールの構成と端末の接続の詳細については、サーバーの管理ガイドを参照してください。

関連情報

- 『サーバー管理』
- Oracle ILOM のドキュメント
- [52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)
- [57 ページの「静的 IP アドレスの SP への割り当て」](#)

OS のインストール

これらのトピックを使用して、プリインストールされた OS を構成するか、代替 OS を使用します。

- [52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)

関連情報

- [56 ページの「Oracle Solaris OS の構成パラメータ」](#)

プリインストールされている OS を構成する

1. どの OS を使用するかを決定します。
 - プリインストールされた OS を使用する予定の場合は、手順 2 に進みます。
 - プリインストールされている OS を使用する予定がない場合は、[52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)に進んでください。
2. プロンプトが表示されたら、ホストで Oracle Solaris OS を構成するための画面上の手順に従います。

構成の確認を求めるプロンプトが数回表示されるため、そこで確認と変更を行うことができます。特定の値に応答する方法が不明である場合は、デフォルトを受け入れて、あとで Oracle Solaris OS が動作しているときに変更することができます。初期構成中に指定する必要がある Oracle Solaris OS パラメータについては、[56 ページの「Oracle Solaris OS の構成パラメータ」](#)を参照してください。
3. サーバーにログインします。

これで、プロンプトに Oracle Solaris OS コマンドを入力できます。詳細については、Oracle Solaris 11 または 10 OS のマニュアルページとドキュメントを参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs>
<http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs>

関連情報

- [47 ページの「電源コードを準備する」](#)
- [48 ページの「SER MGT ポートに端末またはエミュレータを接続する」](#)
- [49 ページの「はじめてシステムの電源を入れる」](#)
- [56 ページの「Oracle Solaris OS の構成パラメータ」](#)

新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM CLI)

プリインストールされている OS を使用する予定がない場合は、この手順を使用して、サーバーがプリインストールされている OS からブートできないようにします。[52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)の手順 5 を確認してから、この代替手順を実行できます。

1. インストール方法に応じて、適切なブートメディアを準備します。

OS をインストールする方法は数多くあります。たとえば、DVD メディアやネットワーク上の別のサーバーから OS をブートおよびインストールできます。

方法の詳細については、Oracle Solaris ドキュメントの次のセクションを参照してください。

 - 『Oracle Solaris 11 システムのインストール』、「インストールオプションの比較」
<http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs>
 - 『Oracle Solaris 10 インストールガイド (インストールとアップグレードの計画)』、「Solaris インストール方法の選択」
<http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs>
2. Oracle ILOM から、OpenBoot **auto-boot?** パラメータを **false** に設定します。

```
-> set /HOST/bootmode script="setenv auto-boot? false"
```

この設定により、プリインストールされている OS からサーバーがブートしなくなります。ホストの電源がリセットされていない場合に、**bootmode** を使用すると、変更は 1 回のブートにのみ適用され、10 分で期限切れになります。

- OS のインストールを開始する準備ができたなら、ホストをリセットします。

```
-> reset /System
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
Performing reset on /System
```



注記

Oracle ILOM 3.1 で、/SYS の名前空間が /System に置き換えられます。従来の名前は、いつでもコマンドで使用できますが、出力で従来の名前を表示するには、-> set /SP/cli legacy_targets=enabled でこの名前を有効にする必要があります。詳細については、Oracle ILOM 3.1 ドキュメントを参照してください。

- 通信をサーバーホストに切り替えます。

```
-> start /HOST/console
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started. To stop, type #.
```

サーバーで POST を完了するまでに、数分かかることがあります。その後、**ok** プロンプトが表示されます。

- インストール方法に適したブートメディアからブートします。
詳細については、目的のリリースおよびインストール方法に対応した Oracle Solaris インストールガイドを参照してください。

- 『Oracle Solaris 11 システムのインストール』、「インストールオプションの比較」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs>

- 『Oracle Solaris 10 インストールガイド (インストールとアップグレードの計画)』、「Solaris インストール方法の選択」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs>

有効なブートコマンドの一覧を表示するには、次を入力します。

```
{0} ok help File
boot <specifier> ( -- ) boot kernel ( default ) or other file
Examples:
  boot - boot kernel from default device.
        Factory default is to boot
        from DISK if present, otherwise from
NET.
  boot net - boot kernel from network
  boot cdrom - boot kernel from CD-ROM
  boot disk1:h - boot from disk1 partition h
  boot tape - boot default file from tape
  boot disk myunix -as - boot myunix from disk with flags "-as"
```

```

dload <filename> ( addr -- )      debug load of file over network at
address
Examples:
  4000 dload /export/root/foo/test
  ?go      - if executable program, execute it
           or if Forth program, compile it

```

関連情報

- [52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)
- [58 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」](#)

新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM Web インタフェース)

プリインストールされている OS を使用する予定がない場合は、この手順を使用して、サーバーがプリインストールされている OS をブートしないようにします。

1. インストール方法に応じて、適切なブートメディアを準備します。
OS をインストールする方法は数多くあります。たとえば、DVD メディアやネットワーク上の別のサーバーから OS をブートし、インストールできます。
方法の詳細については、Oracle Solaris ドキュメントの次のセクションを参照してください。
 - 『Oracle Solaris 11 システムのインストール』、「インストールオプションの比較」
<http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs>
 - 『Oracle Solaris 10 インストールガイド (インストールとアップグレードの計画)』、「Solaris インストール方法の選択」
<http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs>
2. まだ実行していない場合は、次のタスクを実行して、サーバー上の Oracle ILOM Web インタフェースにアクセスします。
 - a. システムと同じネットワーク上のブラウザで、SP の IP アドレスを入力します。
 - b. ユーザー名とパスワードを入力して、Oracle ILOM にログインします。
3. Oracle ILOM Web インタフェースの左のナビゲーションペインで、「Host Management」> 「Host Boot Mode」を選択します。
「Host Boot Mode」ページが表示されます。
4. 「Host Boot Mode Settings」に次の変更を適用します。
 - a. 「**State**」では、「**Reset NVRAM**」を選択します。
この設定では、スクリプトの設定に基づいて 1 回かぎりの NVRAM (OBP) の変更が適用され、次のホストリセット時に NVRAM がデフォルト設定にリセットされます。
 - b. 「**Script**」には、「**setenv auto-boot? false**」を入力します。
この設定では、プリインストールされている OS を自動的にブートする代わりに、**ok** プロンプトでホストが停止するように構成されます。
 - c. 「**Save**」をクリックします。



注記

次の手順の実行時間は 10 分です。10 分後に、自動的に通常の状態に戻ります。

5. 左のナビゲーションパネルで、「Host Management」>「Power Control」をクリックします。
6. プルダウンメニューから「Reset」を選択し、「Save」をクリックします。
7. 左のナビゲーションパネルで、「Remote Control」>「Redirection」をクリックします。
8. 「Use Serial Redirection」を選択し、「Launch Remote Console」をクリックします。
ホストがリセットされると、シリアルコンソールにメッセージが表示されます。リセットアクティビティが完了するまで数分かかります。**OK** プロンプトが表示されたら、次の手順に進みます。
9. OK プロンプトで、インストール方法に適したブートメディアからブートします。
詳細については、目的のリリースおよびインストール方法に対応した Oracle Solaris インストールガイドを参照してください。

- 『Oracle Solaris 11 システムのインストール』、「インストールオプションの比較」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs>

- 『Oracle Solaris 10 インストールガイド (インストールとアップグレードの計画)』、「Solaris インストール方法の選択」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs>

有効なブートコマンドの一覧を表示するには、次を入力します。

```
{0} ok help File
boot <specifier> ( -- )    boot kernel ( default ) or other file
Examples:
  boot                      - boot kernel from default device.
                           Factory default is to boot
                           from DISK if present, otherwise from
NET.
  boot net                  - boot kernel from network
  boot cdrom                - boot kernel from CD-ROM
  boot disk1:h              - boot from disk1 partition h
  boot tape                 - boot default file from tape
  boot disk myunix -as      - boot myunix from disk with flags "-as"
dload <filename> ( addr -- )  debug load of file over network at
address
Examples:
  4000 dload /export/root/foo/test
  ?go                       - if executable program, execute it
                           or if Forth program, compile it
```

関連情報

- [52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)

- [58 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」](#)

Oracle Solaris OS の構成パラメータ

このトピックでは、Oracle Solaris OS の初期構成中に指定する必要がある構成パラメータについて説明します。

パラメータ	説明
Language	表示された言語の一覧から番号を選択します。
Locale	表示されたロケールの一覧から番号を選択します。
Terminal Type	使用している端末デバイスに対応する端末のタイプを選択します。
Network?	「Yes」を選択します。
Multiple Network Interfaces	構成する予定のネットワークインタフェースを選択します。不明な場合は、一覧の先頭を選択します。
DHCP?	使用しているネットワーク環境に応じて、「Yes」または「No」を選択します。
Host Name	サーバーのホスト名を入力します。
IP Address	この Ethernet インタフェースの IP アドレスを入力します。
Subnet?	使用しているネットワーク環境に応じて、「Yes」または「No」を選択します。
Subnet Netmask	Subnet? で「Yes」を選択した場合は、使用しているネットワーク環境のサブネットのネットマスクを入力します。
IPv6?	IPv6 を使用するかどうかを指定します。不明である場合は、「No」を選択して IPv4 用の Ethernet インタフェースを構成します。
Security Policy	標準の UNIX セキュリティー (No) または Kerberos セキュリティー (Yes) のいずれかを選択します。不明である場合は、「No」を選択します。
Confirm	画面上の情報を確認し、必要に応じて変更します。それ以外の場合は、続行します。
Name Service	使用しているネットワーク環境に応じて、ネームサービスを選択します。 注 - 「None」以外のネームサービスを選択すると、追加のネームサービス構成情報の入力を求めるプロンプトが表示されます。
NFSv4 Domain Name	使用している環境に応じて、ドメイン名構成のタイプを選択します。不明な場合は、「 Use the NFSv4 domain derived by the server 」を選択します。
Time Zone (Continent)	該当する大陸を選択します。
Time Zone (Country or Region)	該当する国または地域を選択します。
Time Zone	タイムゾーンを選択します。
Date and Time	デフォルトの日付と時間を受け入れるか、値を変更します。
root Password	root パスワードを 2 回入力します。このパスワードは、このサーバーの Oracle Solaris OS のスーパーユーザーアカウント用です。このパスワードは、SP のパスワードではありません。

関連情報

- Oracle Solaris OS のドキュメント
- [52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)

静的 IP アドレスの SP への割り当て

ネットワークが DHCP を使用しない場合は、SP のネットワーク設定を構成するまで、NET MGT ポートは動作しません。



注記

使用しているネットワーク上で DHCP を使用できない場合は、SER MGT ポートを使用して ILOM SP に接続し、使用しているネットワークの NET MGT ポートを構成してください。[58 ページ](#)の「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」を参照してください。

- [57 ページ](#)の「SP にログインする (SER MGT ポート)」

関連情報

- [51 ページ](#)の「Oracle ILOM システムコンソール」
- [56 ページ](#)の「Oracle Solaris OS の構成パラメータ」
- [57 ページ](#)の「SP にログインする (SER MGT ポート)」
- [58 ページ](#)の「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」

SP にログインする (SER MGT ポート)

SP がブートしたら、ILOM CLI にアクセスしてサーバーの構成および管理を行います。SP をはじめてブートすると、ILOM CLI プロンプト (->) が表示されます。デフォルトの構成では、**root** という ILOM CLI ユーザーアカウントが提供されています。デフォルトの **root** のパスワードは、*changeme* です。SP ILOM CLI password コマンドを使用して、パスワードを変更します。

1. これが最初にサーバーの電源が投入された場合であれば、**password** コマンドを使用して、**root** パスワードを変更します。

```
hostname login: root
Password:
Last login: Mon Feb 18 16:53:14 GMT 2013 on ttyS0
Detecting screen size; please wait...done

Oracle(R) Integrated Lights Out Manager

Version 3.2.1.2 rxxxxx

Copyright (c) 2013, Oracle and/or its affiliates. All rights
reserved.
Warning: password is set to factory default.

-> set /HOST/users/root password
Enter new password: *****
Enter new password again: *****

->
```



注記

root のパスワードを設定すると、それ以降のリポートでは ILOM CLI ログインプロンプトが表示されます。

2. ログイン名として **root** を入力し、続けてパスワードを入力します。

```
...
hostname login: root
Password: password (nothing
displayed)

Oracle(R) Integrated Lights Out Manager

Version 3.2.1.2 rxxxxx

Copyright (c) 2013 Oracle and/or its affiliates. All rights
reserved.
->
```

関連情報

- ・ 『サーバー管理』
- ・ [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- ・ [37 ページの「配線の要件」](#)
- ・ Oracle ILOM のドキュメント

静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる

NET MGT ポートから SP に接続する予定の場合は、SP に有効な IP アドレスが存在する必要があります。

デフォルトでは、サーバーは、ネットワークの DHCP サービスを使用して IP アドレスを取得するように構成されています。サーバーが接続されているネットワークが IP アドレス指定を行う DHCP をサポートしていない場合は、次の手順に従います。

DHCP をサポートするようにサーバーを構成するには、Oracle ILOM のドキュメントを参照してください。

1. 静的 IP アドレスを受け入れるように SP を設定します。

```
-> set /SP/network pendingipdiscovery=static
Set 'pendingipdiscovery' to 'static'
```

2. SP の IP アドレスを設定します。
Oracle ILOM は、IPv4 DHCP および IPv6 ステートレスのデフォルトネットワーク設定で出荷されます。
 - a. デフォルトの IPv4 DHCP プロパティを変更し、静的 IPv4 アドレスのプロパティ値を設定するには、**IPv4_address** と入力します。

- b. デフォルトの IPv6 DHCP プロパティを変更し、静的 IPv6 アドレスのプロパティ値を設定するには、IPv6_address と入力します。

この設定では、プリインストールされている OS を自動的にブートする代わりに、**ok** プロンプトでホストが停止するように構成されます。

```
-> set /SP/network pendingipaddress=service-processor-IPAddr
Set 'pendingipaddress' to 'service-processor-IPAddr'
```

デフォルトのネットワーク接続設定の変更などの管理タスクの詳細については、Oracle ILOM のドキュメントを参照してください。

3. SP ゲートウェイの IP アドレスを設定します。

```
-> set /SP/network pendingipgateway=gateway-IPAddr
Set 'pendingipgateway' to 'gateway-IPAddr'
```

4. SP のネットマスクを設定します。

```
-> set /SP/network pendingipnetmask=255.255.255.0
Set 'pendingipnetmask' to '255.255.255.0'
```

この例では、**255.255.255.0** を使用してネットマスクを設定します。ご使用のネットワーク環境のサブネットでは、異なるネットマスクが必要になる場合があります。使用している環境にもっとも適したネットマスク番号を使用してください。

5. 保留中のパラメータが適切に設定されたことを確認します。

```
-> show /SP/network
/SP/network
Targets:
Properties:
  commitpending = (Cannot show property)
  dhcp_clientid = xxx.xxx.xxx.xxx
  dhcp_server_ip = xxx.xxx.xxx.xxx
  ipaddress = xxx.xxx.xxx.xxx
  ipdiscovery = dhcp
  ipgateway = xxx.xxx.xxx.xxx
  ipnetmask = 255.255.255.0
  macaddress = xx:xx:xx:xx:xx:xx
  managementport = MGMT
  outofbandmacaddress = xx:xx:xx:xx:xx:xx
  pendingipaddress = service-processor-IPAddr
  pendingipdiscovery = static
  pendingipgateway = gateway-IPAddr
  pendingipnetmask = 255.255.255.0
  pendingmanagementport = MGMT
  sidebandmacaddress = xx:xx:xx:xx:xx:xx
  state = enabled
```

6. SP のネットワークパラメータに対する変更を設定します。

```
-> set /SP/network commitpending=true
Set 'commitpending' to 'true'
```



注記

show /SP/network コマンドをもう一度実行し、パラメータが更新されたことを確認できます。

7. Oracle Solaris OS を構成するときの静的 IP アドレスを設定します。
[52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)を参照してください。

関連情報

- [52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)
- [56 ページの「Oracle Solaris OS の構成パラメータ」](#)
- Oracle ILOM のドキュメント

用語集

A

ANSI SIS	American National Standards Institute Status Indicator Standard.
ASF	警告標準フォーマット (Netra 製品のみ)。
AWG	米国ワイヤゲージ規格。

B

ブレード	サーバーモジュールおよびストレージモジュールの一般名称。 サーバーモジュール および ストレージモジュール を参照してください。
ブレードサーバー	サーバーモジュール。 サーバーモジュール を参照してください。
BMC	Baseboard Management Controller.
BOB	Memory Buffer On Board (オンボードのメモリーバッファー)。

C

シャーシ	サーバーの場合は、サーバーのエンクロージャーを指します。サーバーモジュールの場合は、モジュラーシステムのエンクロージャーを指します。
CMA	ケーブル管理部品。
CMM	シャーシ監視モジュール (サーバーモジュールのみ)。CMM はサーバーモジュールが搭載されたモジュールシステム内のサービスプロセッサです。Oracle ILOM は CMM 上で動作して、モジュラーシステムシャーシ内のコンポーネントの電源管理 (LOM) を提供します。 モジュラーシステム および Oracle ILOM を参照してください。
CMP	チップマルチプロセッサ。

D

DHCP	動的ホスト構成プロトコル。
ディスクモジュール、またはディスクブレード	ストレージモジュールの別名。 ストレージモジュール を参照してください。
DTE	Data Terminal Equipment (データ端末装置)。

E

EIA	Electronics Industries Alliance (米国電子工業会)。
ESD	静電放電。

F

FEM ファブリック拡張モジュール (サーバーモジュールのみ)。FEM により、サーバーモジュールは特定の NEM によって提供される 10GbE 接続を使用できます。[NEM](#) を参照してください。

FRU 現場交換可能ユニット。

H

HBA ホストバスアダプタ。

ホスト Oracle Solaris OS およびその他のアプリケーションを実行する、CPU およびその他のハードウェアを備えたサーバーまたはサーバーモジュールの部分。**ホス**という用語は、プライマリコンピュータと SP を区別するために使用されます。[SP](#) を参照してください。

ホットプラグ可能 電力が供給された状態で交換可能なコンポーネントを表しますが、コンポーネントを取り外す準備が必要です。

ホットスワップ可能 電力が供給された状態で交換可能なコンポーネントを表し、準備の必要はありません。

I

ID PROM サーバーまたはサーバーモジュールのシステム情報が格納されたチップ。

IP Internet Protocol (インターネットプロトコル)。

K

KVM キーボード、ビデオ、マウス。複数のコンピュータで 1 つのキーボード、1 つのディスプレイ、1 つのマウスを共有するには、スイッチの使い方を参照してください。

L

LwA 音響パワーレベル。

M

MAC マシンアクセスコード。

MAC アドレス メディアアクセス制御アドレス。

モジュラーシステム サーバーモジュール、ストレージモジュール、NEM、および PCI EM を収納するラックマウント可能シャーシ (サーバーモジュールのみ)。モジュラーシステムは、その CMM を介して Oracle ILOM を提供します。

MSGID メッセージ識別子。

N

名前空間 最上位の Oracle ILOM ターゲット。

NEBS	ネットワーク機器構築システム (Netra 製品のみ)。
NEM	ネットワークエクスプレスモジュール (サーバーモジュールのみ)。NEM はストレージモジュールへの Ethernet 接続および SAS 接続を提供します。
NET MGT	ネットワーク管理ポート。サーバー SP、サーバーモジュール SP、および CMM 上の Ethernet ポート。
NIC	Network Interface Card/Controller (ネットワークインタフェースカードまたはネットワークインタフェースコントローラ)
NMI	マスク不可能割り込み。
O	
OBP	OpenBoot PROM。OBP は、OpenBoot との関係を示すためにファイル名およびメッセージで使用されることがあります。
Oracle ILOM	Oracle Integrated Lights Out Manager。Oracle ILOM ファームウェアは、各種 Oracle システムにプリインストールされています。Oracle ILOM を使用すると、ホストシステムの状態に関係なく、Oracle サーバーをリモートから管理できます。
Oracle ILOM CMM	CMM で動作する Oracle ILOM (サーバーモジュールのみ)。 Oracle ILOM を参照してください。
Oracle Solaris OS	Oracle Solaris オペレーティングシステム。
P	
PCI	Peripheral Component Interconnect。
PEM	PCIe Express Module (サーバーモジュールのみ)。PCI Express の業界標準フォームファクタに基づくモジュラーコンポーネントで、ギガビット Ethernet やファイバチャネルなどの I/O 機能を提供します。
POST	電源投入時自己診断。
PROM	プログラム可能な読み取り専用メモリー。
PSH	予測的自己修復。
R	
REM	RAID 拡張モジュール (サーバーモジュールのみ)。HBA とも呼びます。 HBA を参照してください。ドライブへの RAID ボリュームの作成をサポートします。
S	
SAS	Serial Attached SCSI。
SCC	System Configuration Chip (システム構成チップ)。
SER MGT	シリアル管理ポート。サーバー SP、サーバーモジュール SP、および CMM 上のシリアルポート。

サーバーモジュール	モジュラーシステムで主要な演算リソース (CPU とメモリー) を提供するモジュラーコンポーネント。サーバーモジュールには、オンボードストレージおよび FEM を保持するコネクタがある場合もあります。
SP	サービスプロセッサ。サーバーまたはサーバーモジュールの SP は、専用の OS を搭載したカードです。SP は Oracle ILOM コマンドを処理し、ホストの電源管理 (LOM) を提供します。 ホスト を参照してください。
SSD	Solid-State Drive (半導体ドライブ)。
SSH	Secure Shell。
ストレージモジュール	サーバーモジュールに演算ストレージを提供するモジュラーコンポーネント。
T	
TIA	Telecommunications Industry Association (米国通信工業会) (Netra 製品のみ)。
Tma	最大周囲温度。
U	
UCP	Universal Connector Port (ユニバーサルコネクタポート)。
UI	ユーザーインターフェース。
UL	Underwriters Laboratory Inc.
U.S. NEC	United States National Electrical Code (米国電気工事基準)。
UTC	協定世界時。
UUID	Universal Unique Identifier (汎用一意識別子)。
W	
WWN	World Wide Name。SAS ターゲットを一意に特定する番号。

索引

あ

奥行き仕様, 13
音響仕様, 14
温度仕様, 14

か

環境仕様, 14
ギガビット Ethernet ポートのピン配列, 41
ケーブル管理アーム
 CMA の参照, 23
構成
 Oracle Solaris, 47
 Oracle Solaris の構成パラメータ, 47
 必要な情報, 47
高度仕様, 14, 14
互換性のあるラック, 23, 23

さ

サーバー
 概要, 10
 設置, 33
サービスプロセッサ
 シリアル管理ポートを使用したアクセス, 57
サービスプロセッサへのログイン
 シリアル管理ポートの使用, 57
最小のケーブル接続, 37
湿度仕様, 14
重量仕様, 13
出荷キットの内容, 17
仕様
 音響, 14
 温度, 14
 環境, 14
 高度, 14, 14
 湿度, 14
 振動, 14
 電気, 14
 物理, 13
仕様の確認, 13
シリアルケーブルのアダプタ, 43
シリアル端末設定, 48
シリアル端末のパリティ, なし, 48
シリアル端末のハンドシェイク, なし, 48
シリアル端末のビット設定, 48
シリアル端末のボーレート, 48
振動仕様, 14
隙間
 保守, 13
図示された LED、ポート、およびスロット, 11
図示されたスロット、ポート、および LED, 11
スタンバイ
 モード, 48

スタンバイモード、AC 接続時, 38
ストップビット, 48
設置
 タスクの概要, 9
 ラックへのサーバー, 33

た

高さ仕様, 13
注意事項
 取り扱い, 18
通気
 ガイドライン, 13
 隙間, 13
電気仕様, 14
電源コード、配線, 47
転倒防止脚または転倒防止バー, 26
ドライブ, 10
取り扱い上の注意事項, 18
取り付け
 CMA, 34

は

配線
 CMA に固定, 44
 Ethernet ポート, 44
 NET MGT ポート, 43
 SER MGT ポート, 43
 シリアルデータケーブルのアダプタ, 43
 電源コード, 47
 必要な接続, 37
背面パネル
 コンポーネント, 11
幅仕様, 13
ビデオコネクタ
 説明, 10
 背面, 11
 ピン配列, 41
 フロント, 11
ピン配列
 NET MGT ポート, 40
 SER MGT ポート, 39
 USB ポート, 39
 ギガビット Ethernet ポート, 41
 ビデオコネクタ, 41
物理仕様, 13
防止対策
 ESD, 19
ポート、スロット、および LED の位置 (図), 11
保守のために必要な隙間, 13
ホットプラグ USB ポート, 38

ま

メッセージの保持、制限, 38
メモリの説明, 10

や

用語

スライドレール部品, 26

ら

ラック

安定化, 26

互換性, 23

取り付け穴、サポート, 24

ラックマウント, 23

安全に関する警告, 24

位置にマークを付ける, 28

サーバーの準備, 20

転倒防止脚または転倒防止バー、伸ばす, 26

ハードウェアの取り付け, 29

ラックの安定化, 26

アルファベット

admin ログイン、パスワードの設定, 57

CMA

キット, 34

ケーブルの固定, 45

ケーブルフックとループストラップ、取り付け, 23

取り付け, 36

必須ハードウェア, 35

DHCP, 43

DIMM

DIMM の説明, 10

ESD 防止対策, 19

Ethernet ポート, 10

LED

図示されたスロット, 11

ポート, 11

NET MGT ポート

DHCP, 43

位置, 11

静的 IP アドレス, 43

配線, 43

ピン配列, 40

Oracle ILOM, 51

Oracle Solaris OS

構成パラメータ, 56

プリインストールされた OS の構成, 52

password コマンド, 57

RJ-45 ケーブル, 37

SER MGT ポート

初期電源投入, 48

配線, 43

ピン配列, 39

SER MGT ポートへのモデムの使用禁止, 43

USB ポート, 10